

高等学校における教科指導の充実

国 語 科

学ぶ楽しさを生徒に実感させる
古典の指導を目指して

—苦手意識を緩和し、古典に対する興味・関心を高めるために—

栃木県総合教育センター
平成24年3月

ま え が き

21世紀は、新しい知識・情報・技術が、政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す、いわゆる「知識基盤社会」の時代であると言われています。そのような時代を生きるために、確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視する「生きる力」をはぐくむことがますます重要になっています。他方、各種の国際的な調査では、我が国の児童生徒について、思考力・判断力・表現力等、知識・技能の活用、学習意欲、学習習慣・生活習慣などに課題があると分析されました。このような状況を踏まえて、平成20年1月の中央教育審議会の答申を受け、平成21年3月に高等学校学習指導要領が告示されました。

この新しい学習指導要領は、高等学校では平成25年度入学生から年次進行で実施されます。総則の一部、総合的な学習の時間及び特別活動においては、平成22年度から先行して実施されています。また、数学、理科及び理数の各教科・科目については、平成24年度入学生から年次進行により先行して実施されます。各学校においては、新しい学習指導要領の理念をどのように実現していくのか、具体的な検討を進めていることと思います。

栃木県総合教育センターでは、基礎・基本の確実な定着を図る教科指導の在り方について研究するとともに、その成果を普及することで生徒の学力の向上に資することを目的に、平成17年度から「高等学校における教科指導の充実に関する調査研究」を行ってきました。今年度は、昨年度に引き続き、「今回の学習指導要領の改訂の趣旨を踏まえるとともに、各教科に求められている課題の解決を図るための教科指導の在り方を探る」ことに重点を置き、国語科、地理歴史科、理科、保健体育科、商業科で調査研究に取り組みました。本冊子はその成果をまとめたものであり、教科指導を充実させる一助として、御活用いただければ幸いです。

最後に、調査研究を進めるに当たり、御協力いただきました研究協力委員の方々に深く感謝申し上げます。

平成24年3月

栃木県総合教育センター所長

瓦 井 千 尋

目 次

1	本調査研究の背景	1
(1)	学習指導要領改訂の基本的な考え方	1
(2)	教育内容の主な改善事項	2
(3)	学習評価の基本的な考え方	2
2	学ぶ楽しさを生徒に実感させる古典の指導の工夫	5
事例1	「うつくし」「らうたし」を手掛かりにして文章を読み味わう	8
事例2	複数の場面を読むことを通して登場人物の心情を考察する	17
事例3	内容に即して筆者の心情や人物像を考えながら読む	27
3	学ぶ楽しさを生徒に実感させる古典の指導を目指して	35
(1)	指導の改善の方向性	35
4	古典を扱う授業を行う上での留意点	39
5	参考資料	45
(1)	「国語総合」「古典A」「古典B」における古典の指導	45
(2)	平成17年度教育課程実施状況調査「生徒質問紙調査」「教師質問紙調査」における、古典に対する生徒・教師の意識	48
(3)	小学校・中学校における「伝統的な言語文化」を扱う授業	51
(4)	新学習指導要領における国語科改訂の要点	53

※本資料は、栃木県総合教育センターのホームページ「とちぎ学びの杜」内、「調査研究」と「教材研究のひろば」のコーナーにも掲載しています。

（「とちぎ学びの杜」 <http://www.tochigi-edu.ed.jp/center/>）

1 本調査研究の背景

今年度の「高等学校における教科指導の充実に関する調査研究」は、平成21年告示の高等学校学習指導要領の改訂の趣旨を踏まえるとともに、各教科に求められている課題の解決を図るための教科指導の在り方を探ることに重点を置き、国語科、地理歴史科、理科、保健体育科、商業科で実施するものである。

各教科で調査研究した内容を次章以降に提示するに当たり、まず、平成21年告示の高等学校学習指導要領改訂の基本的な考え方、教育内容の主な改善事項及び学習評価の基本的な考え方について整理する。

(1) 学習指導要領改訂の基本的な考え方

平成21年告示の高等学校学習指導要領の改訂では、21世紀を生きる子どもたちの教育の充実を図るため、「生きる力」をはぐくむという教育課程の基準全体の見直しを図った。今回の改善の方向性は、平成20年1月の中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」に示されている。答申では、以下の①～⑦を基本的な考え方として、各学校段階や各教科等にわたる学習指導要領の改善の方向性が示された。

- ① 改正教育基本法等を踏まえた学習指導要領改訂
- ② 「生きる力」という理念の共有
- ③ 基礎的・基本的な知識・技能の習得
- ④ 思考力・判断力・表現力等の育成
- ⑤ 確かな学力を確立するために必要な授業時数の確保
- ⑥ 学習意欲の向上や学習習慣の確立
- ⑦ 豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実

具体的には、①については、教育基本法が約60年振りに改正され、21世紀を切り拓く心豊か^{ひら}でたくましい日本人の育成を目指すという観点から、これからの教育の新しい理念が定められたことや学校教育法において教育基本法改正を受けて、新たに義務教育の目標が規定されるとともに、各学校段階の目的・目標規定が改正されたことを十分に踏まえた学習指導要領改訂であることを求めた。③については、読み・書き・計算などの基礎的・基本的な知識・技能は、例えば、小学校低・中学年では体験的な理解や繰り返し学習を重視するなど、発達の段階に応じて徹底して習得させ、学習の基盤を構築していくことが大切との提言がなされた。この基盤の上に、④の思考力・判断力・表現力等をはぐくむために、観察・実験、レポートの作成、論述など、知識・技能の活用を図る学習活動を発達の段階に応じて充実させるとともに、これらの学習活動の基盤となる言語に関する能力の育成のために、小学校低・中学年の国語科において音読・暗唱、漢字の読み書きなど基本的な力を定着させた上で、各教科等において、記録、要約、説明、論述といった学習活動に取り組む必要があると指摘した。また、⑦の豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実については、徳育や体育の充実のほか、国語をはじめとする言語に関する能力の重視や体験活動の充実により、他者、社会、自然・環境とかかわる中で、これらとともに生きる自分への自信をもたせる必要があるとの提言がなされた。

また、高等学校の教育課程の枠組みについては、高校生の興味・関心や進路等の多様性を踏まえ、必要最低限の知識・技能と教養を確保するという「共通性」と、学校の裁量や生徒の選択の幅の拡大という「多様性」とのバランスに配慮して改善を図る必要があることが示された。

（２）教育内容の主な改善事項

平成21年告示の高等学校学習指導要領における教育内容の主な改善事項は以下のようである。

●言語活動の充実

- ・国語をはじめ各教科等で批評、論述、討論などの学習を充実した。

●理数教育の充実

- ・遺伝など、近年の新しい科学的知見等を踏まえ内容を充実し、統計に関する内容を数学Ⅰに導入した。
- ・日常生活や社会との関連を重視した改善を図った。
- ・数学Ⅰに〔課題学習〕を導入したり、科目「理科課題研究」を新設したりするなど、知識・技能を活用する学習や探究する学習を重視した。

●伝統や文化に関する教育の充実

- ・歴史教育（世界史における日本史の扱い、文化の学習を充実）、宗教に関する学習を充実した。
- ・古典（国語）、武道（保健体育）、伝統音楽（芸術「音楽」）、美術文化（芸術「美術」）、衣食住の歴史や文化（家庭）に関する学習を充実した。

●道徳教育の充実

- ・学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育について、その全体計画を作成することを新たに規定した。
- ・現代社会や特別活動において人間としての在り方生き方に関する学習を充実した。

●体験活動の充実

- ・ボランティア活動などの社会奉仕、就業体験を充実するとともに、職業教育において、産業現場等における長期間の実習を取り入れることを明記した。

●外国語教育の充実

- ・指導する単語数を増加するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場とするという観点から、授業は英語で指導することを基本とするなどの改善を図った。

●職業に関する教科・科目の改善

- ・職業人としての規範意識や倫理観、技術の進展や環境等への配慮、地域産業を担う人材の育成等、各種産業で求められる知識・技術等を身に付けさせる観点から科目構成や内容を改善した。

（３）学習評価の基本的な考え方

現在、高等学校においては、学習状況を分析的にとらえる観点別学習状況の評価と総括的にとらえる評定とを、学習指導要領に定める目標に準拠した評価として実施している。小・中学校において観点別学習状況の評価が定着していることから、高等学校段階においても、学習評価の前提となる指導と評価の計画や、観点に対応した生徒一人一人の学習状況を生徒や保護者に適切に伝えていくなど、学習評価の一層の改善が求められている。

このようなことから、高等学校においても、学校教育法や平成21年告示の高等学校学習指導要領

を踏まえ、基礎的・基本的な知識・技能に加え、思考力・判断力・表現力等主体的に学習に取り組む態度に関する観点についても評価を行うなど、観点別学習状況の評価の実施を推進し、きめの細かい学習指導と生徒一人一人の学習の確実な定着を図っていく必要がある。なお、高等学校における教科・科目の評価の観点は、小・中学校との連続性に配慮しつつ、平成21年告示の高等学校学習指導要領の趣旨を踏まえ、生徒の実態に合わせて設定することが適当である。

また、学習評価は、生徒の学習状況を検証し、結果の面から教育水準の維持向上を保障する機能を有するものである。したがって、学校が地域や生徒の実態を踏まえて設定した観点別学習状況の評価規準や評価方法等を明示するとともに、それらに基づき学校において適切な評価を行うことなどにより、高等学校教育の質の保障を図るものである。

平成21年告示の高等学校学習指導要領に対応した評価の観点は、以下の囲みのように整理される。

「知識・理解」及び「技能」については、教科の特性に応じ、知識と技能に関する観点が分けて示されていることもある。また、「思考・判断・表現」については、各教科の目標や内容を踏まえ、当該教科において育成すべき能力にふさわしい名称とし、位置付けられている。

●「関心・意欲・態度」

各教科が対象としている学習内容に関心をもち、自ら課題に取り組もうとする意欲や態度を児童生徒が身に付けているかどうかを評価するもの。評価に当たっては、各教科が対象としている学習内容に対する児童生徒の取組状況を通じて評価することが基本であり、例えば、授業中の挙手や発言の回数といった表面的な状況のみに着目することにならないよう留意する必要がある。

●「思考・判断・表現」

各教科の知識・技能を活用して課題を解決すること等のために必要な思考力・判断力・表現力等を児童生徒が身に付けているかどうかを評価するもの。従来の「思考・判断」に「表現」が加えられた。これは、この観点到に係る学習評価を、言語活動を中心とした表現に係る活動や児童生徒の作品等と一体的に行うことを明確に示したためである。

このため、この観点を評価するに当たっては、単に文章、表や図に整理して記録するという表面的な現象を評価するものではなく、例えば、自ら取り組む課題を多面的に考察しているか、観察・実験の分析や解釈を通じ規則性を見いだしているかなど、基礎的・基本的な知識・技能を活用しつつ、各教科の内容等に即して思考・判断したことを、記録、要約、説明、論述、討論といった言語活動等を通じて評価するものであることに留意する必要がある。

●「技能」

各教科において習得すべき技能を児童生徒が身に付けているかどうかを評価するもの。基本的には、従来の「技能・表現」で評価している内容は引き続き「技能」で評価する。

今回、各教科の内容に即して思考・判断したことを、その内容を表現する活動と一体的に評価する観点として「思考・判断・表現」が設定されたことから、当該観点における「表現」との混同を避けるため、評価の観点の名称が「技能・表現」から「技能」に改められた。

●「知識・理解」

各教科において習得すべき知識や重要な概念等を児童生徒が理解しているかどうかを評価するもの。従来の「知識・理解」の趣旨を踏まえた評価を引き続き行う。

また、評価の在り方については、「高等学校学習指導要領解説 総則編」で、次のように述べられている。

〈第3章 5 (12) 指導の評価と改善（第1章第5款の5の(12)〉〉

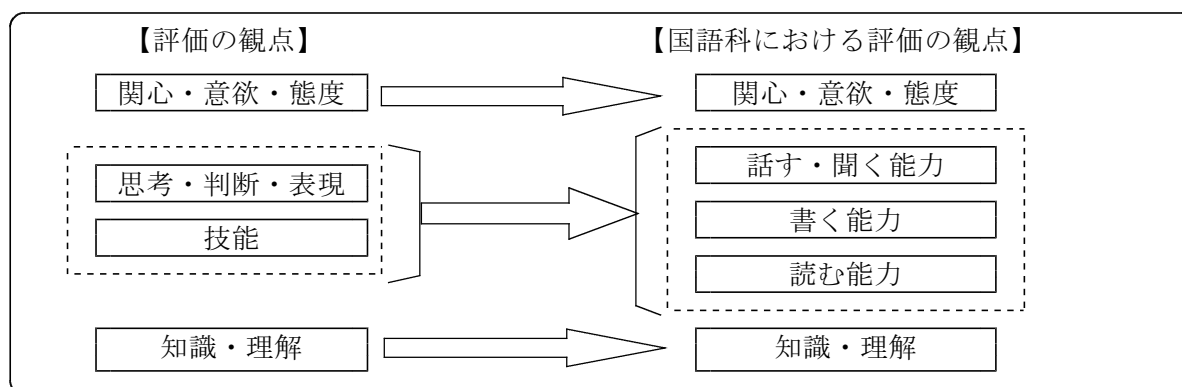
基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着を図るとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等を育成し、学習意欲を高めるための指導を行うためには、評価の在り方が大切である。いわゆる評価のための評価に終わることなく、生徒一人一人の学習の成立を促すための評価という視点を一層重視することによって、教師が自らの指導を振り返り、指導の改善に生かしていくことが特に大切である。

評価に当たっては、生徒の実態に応じた多様な学習を促すことを通して、主体的な学習の仕方が身に付くように配慮するとともに、生徒の学習意欲を喚起するようにすることが大切である。その際には、学習の成果だけでなく、学習の過程を一層重視する必要がある。特に、他者との比較ではなく生徒一人一人の持つよい点や可能性などの多様な側面、進歩の様子などを把握し、学年や学期にわたって生徒がどれだけ成長したかという視点を大切にすることが重要である。また、生徒が自らの学習過程を振り返り、新たな自分の目標や課題をもって学習を進めていけるような評価を行うことが大切である。

学習評価においては、生徒のよい点や進捗の状況などを積極的に評価するとともに、指導の過程や成果を評価し、教師が自らの指導の改善を行い、生徒の学習意欲の向上に生かすようにすることが大切である。そのためにも、「関心・意欲・態度」、「思考・判断・表現」、「技能」、「知識・理解」の4観点の趣旨を踏まえ、適切に評価を進めていくことが求められる。

なお、平成21年告示の高等学校学習指導要領に対応した国語科の評価の観点は、国語科における現行の評価の観点と変わらず、「関心・意欲・態度」、「話す・聞く能力」、「書く能力」、「読む能力」、「知識・理解」という、「国語総合」の領域による能力の5観点である。これは、言語による「思考・判断・表現」と言語の「技能」とは密接不離の関係にあり、個々に分けて評価することは困難であることによる。

平成21年告示の高等学校学習指導要領に対応した評価の観点と、国語科における評価の観点との対応を整理すると、以下のようになる。



※本冊子においては、以降、平成11年3月に告示された学習指導要領を「現行の学習指導要領」、平成21年3月に告示された学習指導要領を「新学習指導要領」として記す。

※本冊子に掲載した単元等に付してある評価規準は、新学習指導要領における教科・科目を想定して、参考として掲載したものである。

2 学ぶ楽しさを生徒に実感させる古典の指導の工夫

前掲の、新学習指導要領改訂に際しての教育内容の主な改善事項のうち、国語科に特に関わるものとしては、「言語活動の充実」、「伝統や文化に関する教育の充実」がある。

「言語活動の充実」については、国語科はもちろんであるが、各教科においても批評、論述、討論などの学習を充実することが求められている。本研究（国語科）においては平成21年度、平成22年度に「言語活動の充実」を研究テーマとし、言語活動を取り入れた指導をさらに充実させるための工夫を探った。

そこで今年度は「伝統や文化に関する教育の充実」に着目した。高等学校国語科における「伝統や文化に関する教育の充実」とは、すなわち、古典指導の充実ということになる。

平成17年度教育課程実施状況調査における「生徒質問紙調査」の回答からは、生徒の約7割が古典に対して苦手意識をもっているという現状が浮き彫りになった※1。県内の国語教師からの聞き取りによると、生徒が抱く古典への苦手意識は、調査から数年が経過した現在においても、あまり改善されてはいないようである。

もちろん、古典を苦手だと感じることは個人の好みもかわる。しかし、苦手であるという意識がその科目に対する学習意欲を低下させてしまうことを、教師は体験的に知っている。古典においても、生徒が抱く苦手意識が古典に対する学習意欲を低下させてしまうのではないかと懸念される。学習意欲そのものが低下してしまうと、古典の豊かな世界に触れる前に生徒は古典を学習すること自体を断念してしまいかねない。

古典を扱う授業において、教師は、生徒の約7割が古典に対して苦手意識をもっているという現状を踏まえ、生徒を古典の学習に向かわせるための第一歩として、まずは、学ぶ楽しさを生徒が実感できる学習場면을授業の中に設けることから始めなければならない。学ぶ楽しさを生徒に実感させる古典の授業を構想し、実施し続けていくことは、古典に対する生徒の苦手意識を緩和すること、さらには、古典に対する生徒の興味・関心を高めることにもつながると思われる。そのような指導を積み重ねていくことは、高等学校国語科における「伝統や文化に関する教育の充実」に直結するだけでなく、生徒の、言語文化の継承と創造の担い手となる資質を育成することにも資する。

そこで、今年度の「高等学校における教科指導の充実」（国語科）においては、研究テーマを「学ぶ楽しさを生徒に実感させる古典の指導の工夫」として、生徒が抱く苦手意識を緩和し、古典に対する興味・関心を高めるための指導について研究・検討を重ねてきた。

本研究における「学ぶ楽しさを生徒に実感させる古典の授業」は、「展開に特別な工夫を凝らした『非日常の授業』」の枠組みにおいてではなく、「日常の授業」の枠組みにおいて考えた。普段の指導の改善を図ることこそが、上述の古典学習を取り巻く現状の改善につながると考えたからである。また、「学ぶ楽しさ」に関しては、例えば、「その授業がたまたま楽しかった」などというような、授業に対するその場限りの感情に根差した「楽しさ」ではなく、学習内容に対して納得をもって理解したことなどに根差した「楽しさ」を感じさせることが、高等学校という発達段階に相応する「学ぶ楽しさ」になるのではないかと考えた。

このようなことから、本研究では「学ぶ楽しさを生徒に実感させる授業」を次のように構想した。

※1 第5章（2）を参照。

- 学ぶ楽しさを生徒が感じることができるよう、授業の中に次のような学習場面を設ける
 - ・ 生徒が学習内容に対して納得をもって理解することができる学習場面
 - ・ 生徒が「学んできた知識を生かした」などというような実感をもつことができる学習場面

【授業の展開に関する留意事項】

- ・ 言語活動を通して、各科目における指導事項を指導すること
- ・ 近代以降の文章を扱うのと同様に、表現の仕方に注意したり、要約や詳述をしたり、想像力をはたらかせたりしながら読み味わい、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにしていくような展開を心がけること（語句の意味の理解や文の現代語訳といった、「文章の表面的な意味をとらえる学習」だけで終わらせないこと）

【教材に関する留意事項】

- ・ 生徒の実態や指導のねらいに応じては、現代語訳なども適切に利用すること

このような考えの下、研究協力委員が勤務校で担当する各科目において、学ぶ楽しさを生徒に実感させる古典の指導を目指して授業実践を行った。各事例は現行の学習指導要領の各科目における実践であるが、新学習指導要領の「国語総合」、「古典A」、「古典B」における指導事項や言語活動例、及び新学習指導要領に対応した評価の考え方を踏まえたものである。

事例1 「うつくし」「らうたし」を手掛かりにして文章を読み味わう

この実践では、言葉について掘り下げて考える学習活動を行い、そこで調べた言葉を切り口にして文章を読み味わわせることを目指した。「国語総合」を想定した事例である。

授業においては、学習内容に対して納得をもって理解させることで、生徒が学ぶ楽しさを感じられるようにした。学習内容に対して納得をもって理解させるため、授業の中に、「調べ学習」、「調べた語句を用いての短文作り」という学習場面を設けた。

事例2 複数の場面を読むことを通して登場人物の心情を考察する

この実践では、複数の場面を読み進めていく学習活動を通して、登場人物の心情を多角的な視点から考察させることを目指した。「古典A」を想定した事例である。

授業においては、学んできた知識を生かしたと実感させることで、生徒が学ぶ楽しさを感じられるようにした。学んできた知識を生かしたという実感をもたせるため、授業では、既習作品（『大鏡』）の学習を通して得た知識や自らの文法知識などを意識させながら読解を進めていくようにした。

事例 3 内容に即して筆者の心情や人物像を考えながら読む

この実践では、本文を丁寧に読みとくための学習活動を通して、筆者の心情や人物像を考えながら読ませることを目指した。「古典B」を想定した事例である。

授業においては、学習内容に対して納得をもって理解させることで、生徒が学ぶ楽しさを感じられるようにした。学習内容に対して納得をもって理解させるため、授業の中に、現代語訳をするだけであると、おそらく生徒が見過ごしてしまうような部分を、ワークシートでの作業やグループでの話し合いによって丁寧に読みといていく学習場面を設けた。

次章に示した各事例において、単元全体の流れは「2（5）指導と評価の計画」に記したが、今回は、1 単位時間ごとの指導計画を示さず、学習のまとまりとしての「次」で示してある。これは、「次」で示すことにより、身に付けさせたい力を育成するための学習のまとまりが把握しやすくなることや、学校や生徒の実態に応じて、それぞれの「次」に要する指導時数は適切に考える必要があること、などの理由による。

なお、各事例における「3 授業の様子」では、事例実践校においてそれぞれの「次」にどれくらいの時間をかけて展開したのかが分かるようにした。

事例 1

「うつくし」「らうたし」を手掛かりにして文章を読み味わう

1 ねらい

新学習指導要領の「国語総合」の指導事項「C 読むこと」の「(1) ウ 文章に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み味わうこと。」を指導の中心に取り上げる。「古典B」の言語活動例の「ア 辞書などを用いて古典の言葉と現代の言葉とを比較し、その変遷などについて分かったことを報告すること。」を参考にして設定した、「現代語で『かわいい』を意味する五つの古語の用いられ方の違いを辞書で調べ、それぞれの言葉の意味に合った現代語の短文をグループで話し合って作る」という言語活動を通して、文章に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み味わうための言語能力を育成する。

この実践では、学習内容に対して納得をもって理解させることで、生徒が学ぶ楽しさを感じられるようにした。学習内容に対して納得をもって理解させるため、授業の中に、「調べ学習」、「調べた語句を用いての短文作り」という学習場面を設けた。

2 学習活動の概要

(1) 単元名 随筆 『枕草子』－「うつくしきもの」－

(2) 単元の目標

- ①文章に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み味わおうとする。
(関心・意欲・態度)
- ②文章に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み味わう。
(読む能力)
- ③国語における言葉の成り立ち、表現の特色及び言語の役割などを理解する。
(知識・理解)

(3) 取り入れる言語活動

現代語で「かわいい」を意味する五つの古語の用いられ方の違いを辞書で調べ、それぞれの言葉の意味に合った現代語の短文をグループで話し合って作る。

(4) 単元の評価規準

関心・意欲・態度	読む能力	知識・理解
「うつくし」「らうたし」という古語に着目し、文章に描かれた情景・心情を表現に即して読み味わおうとしている。	「うつくし」「らうたし」という古語に着目し、文章に描かれた情景・心情を表現に即して読み味わっている。	「うつくし」「らうたし」という古語の語義や意味を理解している。

(5) 指導と評価の計画 (全4次)

次	学習活動	指導上の留意点	単元の評価規準と評価方法
1	● 読解のための準備をする (1)「かわいい」と思うもの(動作を含む)について箇条書きし、書き出したものに共通する事柄をまとめる。 (ワークシート①(資料1)) (2)『枕草子』の成立、内容についてまとめる。 (3)類聚的章段についての特色をまとめる。	○なるべく具体的に書くよう指示する。 ○(2)、(3)は簡潔に行う。	
2	● 「うつくしきもの」本文を読解する (1)「うつくしきもの」本文を音読する。 (2)本文を音読した後、現代語訳プリントを用いて本文の内容を読み取る。 (3)筆者が「うつくしきもの」として本文に取り上げているものの共通点をとらえる。	○単語の区切りに注意させる。 ○本文と現代語訳を対応させ、本文の内容を読み取らせる。 ○必要に応じて古語の意味を辞書で確認させる。 ○訳は同じであっても、本文に用いられている古語が異なることに気付かせる。 ○「何も何も、小さきものは、みなうつくし。」の一文に気付かせる。	読む能力 [行動の観察]
3	● 「うつくし」「らうたし」を含む五つの古語の語義を調べ、ワークシート②(資料2)にまとめる (1)辞書で五つの古語について語義を調べる。(個別) (2)調べた古語を用いて現代語で短文を作り、発表する。 (個別→グループ) (3)現在用いられている「かわいい」という感覚に一番近い古語を選ぶ。	○机間指導を行いながら適宜助言する。 ○短文はまずは個別で作らせる。その後、グループ内で発表させる。グループで各自の短文の適否を検討し、グループとして全体に発表する短文を1文以上作らせる。 ○短文は現代語で作成するが、五つの古語はそのまま文中に取り入れさせる。	知識・理解 [行動の観察、ワークシート②の記述の確認]
4	● 筆者がなぜ「うつくし」「らうたし」という古語を用いたのかを考える (1)本文で、「をかしげなるちごの、～かいつきて寝たる」の箇所にだけ「らうたし」が使われていたのはなぜかを考える。 (2)ワークシート①(資料1)と「うつくしきもの」本文の内容を比較し、昔と現代における「かわいい」という感覚について気付いたこと話し合う。		読む能力 [ワークシート②の記述の確認] 関心・意欲・態度 [行動の観察、ワークシート①・ワークシート②・「授業後の生徒の感想」の記述の分析]

3 授業の様子

【第1次】読解のための準備をする。

ここは単元の導入として1時間をかけて展開した。

ワークシート①（資料1）に「かわいい」と思うもの（動作を含む）について箇条書きさせる際は、なかなか書けない生徒もいたので、書けている生徒の中から2、3人を選んで発表させた。その後、もう一度書く時間をとったところ、ほとんどの生徒が書くことができた。

また、『枕草子』の成立や類聚的章段についての特色などについても簡単に整理した。

【第2次】「うつくしきもの」本文を読解する。

ここは1時間をかけて展開した。

現代語訳を対応させながら本文の内容を読み取る際には、必要に応じて古語の意味を辞書で確認させた。一通り内容を整理した後に、「本文で筆者が『うつくし』と感じているものの共通点が示されている一文はどこか。」と質問したところ、生徒は現代語訳を参考にして「何も何も、小さきものは、みなうつくし。」の箇所を挙げる事ができた。

【第3次】「うつくし」「らうたし」を含む五つの古語の語義を調べ、ワークシートにまとめる。

ここは約1時間をかけて展開した。

この単元では、「うつくし」「らうたし」という古語を切り口にして文章を読み味わうことを目指しているが、そのためには、これらの古語の用いられ方の微妙な違いを生徒に把握させる必要があった。そのため、第3次ではそれぞれの古語の語義を辞書で調べさせることから授業に入った。辞書の種類によって見るべき箇所が異なるので、机間指導を行いながら生徒に適宜助言した。ワークシート②（資料2）の□には、現代語で「かわいい」という意味をもつ古語の中から、生徒が持っている古語辞典で調べることができると思われる古語を五つ取り上げた。個別に調べさせ、語義が載っていない辞書を使用している生徒には、辞書の例文を写すよう指示した。その後、語義を調べることができた生徒を指名してそれぞれの語義を板書させ、生徒の全員に確認させた。

次に、ワークシート②（資料2）の□の作業へと進んだ。ここでは、□で調べた古語の用いられ方の違いを意識させるために、古語をそのまま取り入れて現代語で短文を作るよう指示した。短文を作らせる際には、古語辞典だけではなく国語辞典の例文も参考にするようアドバイスした。最初は個別に作らせ、その後でグループになり、互いの例文の適否を確認させた。生徒は互いの短文を見て、感心したり自分の作ったものを手直ししたりしていた。その後、各グループごとに短文を発表させた。

最後に、ワークシート②（資料2）の□の問いについて考えさせた。□ではほとんどの生徒が「うつくし」を選んでいった。

【第4次】筆者がなぜ「うつくし」「らうたし」という古語を用いたのかを考える。

ここは約1時間をかけて展開した。

まず、「うつくし」はどのような場合に用いられているのかを質問したところ、生徒からは、「かわいいものを見たとき」や「小さなものを見たとき」などの答えが返ってきた。

次に、ワークシート②（資料2）の□の問いについて考えさせた。生徒からは、「見るだけではなく、赤ちゃんを自分で抱っこしてかわいいと感じたから。」や「抱っこした赤ちゃんが自分にしがみついて寝ている様子を見て、守ってあげたいと感じたから。」などという答えが返ってきた。

そこで、「うつくし」と「らうたし」はどのように使い分けられているのかを質問したところ、「何かを見て『かわいい』と感じたときには『うつくし』で、自分でそのものに触ったり何かをしたりして『小さくて弱いから守ってあげたい、大切に扱ってあげたい』と感じたときには『らうたし』が使われている。」という答えが返ってきた。

最後に、第1次に記入させたワークシート①（資料1）を生徒に返却し、本文の内容と自分が挙げた「かわいい」と思うものを比較させ、昔と現代における「かわいい」という感覚について気付いたことを話し合わせた。

【授業後の生徒の感想】

- ・ 昔の人の感覚でも共感できる部分は沢山あった。古語は難しいけれど学習していて楽しい。今回のように、現代と比べて考えることはいいことだと思った。
- ・ いつの時代でもかわいいものは同じなんだなと思いました。平安時代は今から見ると遠い昔なのに『うつくしもの』を読んで現代との共通点を見つけられたので、時代の距離が近づいたような気がしました。
- ・ 昔から今まで受け継がれている言葉を学ぶと昔の人とつながっている感じがする。
- ・ 清少納言の書いた別の文章も読んでみたい。
- ・ 昔使われていた「かわいい」という言葉はたくさんあり、使い方がそれぞれ違うのだと分かった。

「授業後の生徒の感想」からは、学習を通して「うつくし」「らうたし」という語句について納得をもって理解したことで、学習の楽しさを感じた生徒（波線）や、古典世界を身近なものとしてとらえ直した生徒（二重波線）がいたことが分かる。また、授業を通して古典作品への興味をもった生徒（破線）がいたことも分かる。

4 評価の例

読む能力の評価は主として第2次と第4次に行った。

このうち、第2次の評価は、第4次の学習活動の前提として、「生徒が文章の内容を大雑把に把握できているかどうか」を探るために行った。具体的には、「筆者が『うつくしきもの』として本文に取り上げているものの共通点をとらえる」学習場面において、「何も何も、小さきものはみなうつくし。」の一文を指摘できるかどうかを、観察することで評価した。「何も何も、小さきものはみなうつくし。」の一文を指摘できている生徒を「おおむね満足できる」状況（B）とした。現代語訳と本文とを見比べさせることで、すべての生徒がこの一文に気付くことができた。

第4次の評価は、この単元における読む能力の主とする評価として行った。具体的には、授業後にワークシート②（資料2）の四の記述を確認することで評価した。「うつくし」と「らうたし」の違いについて把握したことを基にして、「をかしげなるちごの、～かいつきて寝たる」の箇所だけに「らうたし」が使われていた理由を説明できているものを「おおむね満足できる」状況（B）とした。ワークシート②記入例（資料2）は「おおむね満足できる」状況（B）と見なすことのできる例である。「努力を要する」状況（C）と判断した生徒には、ワークシート②の□、□で記述した内容を基にして「うつくし」「らうたし」の語句のイメージを考えさせたり、「をかしげなるちごの、～かいつきて寝たる」における「ちご」の様子を考えさせたりするなどの手立てを、個に応じて行った。

知識・理解の評価は主として第3次に行った。授業時の学習の様子を観察や、授業後にワークシート②（資料2）の□～□の記述を確認することで評価した。すべての古語の語義などが調べてあり、かつ、「うつくし」「らうたし」の語義に合った適切な短文が書けているものを「おおむね満足でき

る」状況（Ｂ）とした。ワークシート②記入例（**資料２**）はすべての古語の語義が調べてあることに加え、五つの古語すべてについて語義に合った適切な短文が書けていることから、事例実践校においては「おおむね満足できる」状況（Ｂ）の中でも優れたものであると判断し、「十分満足できる」状況（Ａ）と見なした。「努力を要する」状況（Ｃ）と判断した生徒には、語句を調べるに当たって、その生徒の持っている辞書ではどこの項目を見ればよいのかを指導したり、別の生徒が持っている辞書を参考にさせたり、どのような短文にすればいいのかを同じグループの生徒と話し合わせたりするなどの手立てを、個に応じて行った。

関心・意欲・態度の評価は主として第４次に行った。昔と現代における「かわいい」という感覚について気付いたことを話し合わせた授業時の様子を観察したり、授業後にワークシート①（**資料１**）、ワークシート②（**資料２**）、「授業後の生徒の感想」の記述を分析したりすることで評価した。自身のワークシートと本文とを比較して気付いたことをまとめようとしているものを「おおむね満足できる」状況（Ｂ）とした。「努力を要する」状況（Ｃ）と判断した生徒には、現代の言葉と古語との共通点や相違点を考えさせたり、他の生徒の意見を参考にさせたりするなどの手立てを、個に応じて行った。

５ 成果と課題

（１）成果

本事例の成果としては、次のようなことが挙げられる。

ア 本文（「うつくしきもの」）にある「うつくし」「らうたし」という語句について、生徒が納得をもって理解する場を作ることができたこと

今回の授業では、現代語訳を配布することにより、同じ訳でも本文に用いられている古語が違うということの発見につながった。その発見を手掛かりにして、辞書での調べ学習や古語を用いて短文を作る学習、さらには本文の読解へとつなげた。「授業後の生徒の感想」からは、生徒が、本文にある「うつくし」「らうたし」という語句について、納得をもって理解することができたことが分かる。

本実践では、辞書で調べる学習場面や古語を用いて短文を作る学習場面を設けたことで、生徒が納得をもって理解する場を作ることができたものと思われる。

イ 調べ学習の中で生徒同士による学び合いが行われていたこと

グループ学習の場面では、生徒は互いの短文を見て、感心したり自分の作ったものを手直ししたりしていた。グループ学習という、生徒同士の間で互いにアドバイスし合えるような学習形態を取り入れることにより、生徒同士が互いに意見を交わし、学び合う姿が見られた。

（２）課題

課題としては、次のようなことが挙げられる。

ア 調べ学習を行う際の、授業の進め方の工夫

今回の授業では、「調べるための道具」を生徒各自の古語辞典とし、授業に持参させた。生徒が持っている古語辞典は様々な出版社によるものであったために、グループ学習による学び合いは効果的なものとなった。

しかし、調べ学習においては、「調べるための道具」を、生徒が常に自前で用意できるとは限らない。「調べるための道具」を選択する幅を広げるためにも、学校図書館との連携や情報機器の活用などを視野に入れて、調べ学習を行う際の授業の進め方を工夫する必

要がある。

イ 古典に対する興味・関心を持続させる工夫

今回の授業を通して、生徒は、学習する内容が自分たちにとって身近なものと感じると、興味・関心を抱くようであることが分かった。古典作品に描かれている登場人物の考え方や心情を自分自身に引き付けて考えさせたり、古典の世界における習慣や年中行事などが、現在の自分の生活にもつながっていることを意識させたりするなどして、古典に対する生徒の興味・関心を持続させる工夫が必要である。

使用教科書

『改訂版高等学校標準古典』第一学習社

◇「かわいらしい」と思ふもの(動作を含む)を簡潔書きで書き出して
みよう。(い)書き(ま)書き

(組) (番氏名)

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

◇書き出したものに共通する事柄をまとめてみよう。

ワークシート① 記入例

・小さ
い
動物

◇「かわいらしい」と思ふもの(動作を含む)を簡潔書きで書き出して
みよう。(い)書き(ま)書き

(組) (番氏名)

・犬の子ども
・猫
・うさぎ
・ライオンの子ども
・白くまの子ども
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

◇書き出したものに共通する事柄をまとめてみよう。

『枕草子』「うつくしきもの」学習プリント

(組) (番氏名)

□ 次の①～⑤の古語(形容詞)は全て「かわいい」という意味を表す。どのようなときに用いられていたのか古語辞典で調べてみよう。

①「いとほし」	
②「かなし」	
③「らうたし」	
④「うつくし」	
⑤「をかし」	

□ ①～⑤の古語について、現代においてはどのように用いることができるか。清少納言になったつもりで具体例を作ってみよう。

(例) 「うつくしきもの。テディーベアのストラップ。」など

①「いとほし」	
②「かなし」	
③「らうたし」	
④「うつくし」	
⑤「をかし」	

□ □で調べた古語の中で自分たちが使う「かわいい」という表現の用い方に近い古語はどれか。

□ 「本文」をかしげなるち「このあからさまに抱きて遊ばしうつくしむほどにかいつきて寝たるいとらうたし。」の箇所「らうたし」が用いられているのはなぜか。考えてみよう。

『枕草子』『うつ／＼きもの』学習プリント

(組) (番氏名)

□ 次の①～⑤の古語(形容詞)は全て「かわいい」という意味を表す。どのようなときに用いられていたのが古語辞典で調べてみよう。

①「いとほし」	弱い者に対する同情や気持
②「かなし」	人事に對しては情愛が痛切で胸がつまる感じ、自然に對しては深く心を打たれる感じを表す
③「らうたし」	「をかしけな多思ひあかづきまにいたゞく遊ばし」 「うつくしまほどにかいつきて寝たる、いとらうたし」 いたむてやりたいような気持ちにかられる心情
④「うつくし」	「父母を見れば尊し妻を見ればめづし」 「うつくし」
⑤「をかし」	小さいものをかわいいと思ふ意 「命つぎにいとすは、前のせり報いが、 このせりをかしかと」 知的な感性で明るく郎らかな感情情趣を表した語

□ ①～⑤の古語について、現代においてはどのように用いることができるか。清少納言になつたつもりで具体例を作ってみよう。

(例) 「うつ／＼きもの。デディーヘアのストラップ。」など

①「いとほし」	捨てた猫をいとはしく思ふ。
②「かなし」	雨にも風にもまけず必死に成長するがはしま花
③「らうたし」	食べ物を一生懸命に食べている蛾、らうたし。
④「うつくし」	うつくしまも。アースリぬいぐるみ。
⑤「をかし」	蝶を追いかけている子どもをかし。

□ □で調べた古語の中で自分たちが使う「かわいい」という表現の用い方に近い古語はどれか。
↓「うつくし」

□ 「本文」をかしげなるちの、あからさまに抱きて遊ばにうつ／＼むほに、かいつきて寝たるいとらうたし。の箇所「らうたし」が用いられているのはなぜか。考えてみよう。

見るだけでではなく、赤ちゃんを自分で抱っこして
かわいいと感じたから。

事例 2

複数の場面を読むことを通して登場人物の心情を考察する

1 ねらい

新学習指導要領の「古典A」の指導事項「(1) ア 古典などに表れた思想や感情を読み取り、人間、社会、自然などについて考察すること。」を指導の中心に取り上げる。「古典A」の言語活動例の「ウ 図書館を利用して古典などを読み比べ、そこに描かれた人物、情景、心情などについて、感じたことや考えたことを文章にまとめたり話し合ったりすること。」を参考にして設定した、「複数の場面を読み比べ、そこに描かれた登場人物の心情を話し合う」という言語活動を通して、古典などに表れた思想や感情を読み取り、人間、社会、自然などについて考察するための言語能力を育成する。

この実践では、学んできた知識を生かせたと実感させることで、生徒が学ぶ楽しさを感じられるようにした。学んできた知識を生かせたという実感をもたせるため、授業では、既習作品（『大鏡』）の学習を通して得た知識や自らの文法知識などを意識させながら読解を進めていくようにした。

2 学習活動の概要

(1) 単元名 『蜻蛉日記』－「うつろひたる菊」「泔坏の水」－

(2) 単元の目標

- ①古典などに表れた思想や感情を読み取り、人間、社会、自然などについて考察しようとする。
(関心・意欲・態度)
- ②古典などに表れた思想や感情を読み取り、人間、社会、自然などについて考察する。
(読む能力)
- ③古典特有の表現を味わったり、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解したりする。
(知識・理解)

(3) 取り入れる言語活動

複数の場面を読み比べ、そこに描かれた登場人物の心情を話し合う。

(4) 単元の評価規準

関心・意欲・態度	読む能力	知識・理解
本文に表れた思想や感情を読み取り、作者や登場人物の心情について多角的な視点から考察しようとしている。	本文に表れた思想や感情を読み取り、作者や登場人物の心情について多角的な視点から考察している。	本文中の和歌を、現代の言葉に即して理解している。

(5) 指導と評価の計画 (全3次)

次	学習活動	指導上の留意点	単元の評価規準と評価方法
1	●平安時代における貴族の結婚形態についての理解を深めるとともに、教科書掲載箇所までの作品の流れをつかむ (1) 平安時代の貴族の結婚形態について確認し、ワークシート①(資料1)にまとめる。 (2) 作者と藤原兼家について確認する。 (3) 『蜻蛉日記』についての理解を深める。 (4) 作者と兼家が結婚するまでの経緯を知る。	○国語便覧等も活用させる。 ○既習の歴史物語『大鏡』におけるエピソードから兼家の印象を挙げさせる。 ○作者と兼家の年齢等の確認のため、プリント(資料2)を配布し、記入させる。 ○便覧等を使用し、平安時代の女流日記文学としてのこの作品の文学的意義を考えさせる。 ○プリントを配布し、兼家が積極的に求婚してきたことを意識させる。	
2	●「うつろひたる菊」の本文を読解する (1) 音読・解釈をする。 (2) 3首の和歌を、自分たちが日常的に使っている言葉で置き換え、ワークシート②(資料3)にまとめる。(グループ) (3) 各グループの和歌の解釈を読み合い、理解を深める。 ----- ●「汙坏の水」の本文を読解する (1) 音読・解釈をする。	○読解に必要な文法等を適宜確認しながら読ませる。 ○敬語がほとんどないため、主語の把握に留意させる。 ○散文の部分が和歌の詠まれる経緯を説明していることに気付かせる。 ○歌の詠み手の心情に留意させる。 ○グループごとに発表させ、全体で確認させる。 ○解釈の留意点は「うつろひたる菊」と同じ。	読む能力 [行動の観察] 知識・理解 [ワークシート②の記述の確認] 読む能力 [行動の観察]
3	●兼家の作者に対する気持ちを考える (1) この単元で読んできた『蜻蛉日記』の複数の場面を通して、兼家の作者に対する気持ちをグループで考え、ワークシート③(資料4)に記入する。	○本作品は女性の視点から書かれたものではあるが、夫である兼家の言い分も考えさせるようにする。兼家の気持ちを自分に引き寄せて考えさせる。	関心・意欲・態度 [ワークシート③の記述の分析]

3 授業の様子

【第1次】平安時代における貴族の結婚形態についての理解を深めるとともに、教科書掲載箇所までの作品の流れをつかむ。

ここは1時間をかけて展開した。

本文を読んでいくための準備として、まず、生徒から、当時の貴族の結婚形態や既習作品である『大鏡』での藤原兼家のエピソードとして知っていることを挙げさせた。また、教科書掲載箇所までの作品の流れを把握させるために、『ビギナーズ・クラシックス 蜻蛉日記』（角川書店）を参考にして、兼家と作者が結婚するまでの経緯の場面を現代語訳した資料を作成し、配布して読ませた。

【第2次】「うつろひたる菊」「泔坏の水」の本文を読解する。

ここは約3.5時間をかけて展開した。

「作品世界に関して知っていること」として第1次に生徒から挙げられた事項も意識させながら本文を読み進めていく中で、登場人物の心情を考えさせた。また、散文の部分が和歌の詠まれる経緯の説明であることに気付かせるようにした。

和歌を自分たちが日常的に使っている言葉で置き換えるというグループ作業を入れたのは、和歌の内容を自分たちの実感としてとらえさせるためであった。しかし、生徒から提出されたワークシート②（資料3）を見ると、これはなかなか難しかったようである。「嘆きつつ〜」の歌は小倉百人一首にも採られていて、生徒には馴染みがあったことが逆に解釈の自由度を狭めたのか、既成の解釈にとられる傾向があり、独創的な言葉遣いによる解釈は出てこなかった。授業後の生徒の感想でも、普段の言葉遣いで和歌を解釈するのは難しかったと書かれているものが見られた。作業がうまく進まないグループについては、第1次で使用した「作者と兼家が結婚するまでの経緯の場面を現代語訳した資料」を活用するよう指示したところ、それを参考にしながら自分たちなりの表現をしようと努めていた。グループでの話し合いを通して、3首の歌に対する理解そのものは深まったと思われる。

次に挙げるのは、「うつろひたる菊」に出てくる3首の和歌を、各グループが自分たちの普段の言葉遣いで置き換えた例である。

● うたがはしほかに渡せるふみ見ればここやとだえにならんとすらむ

- ・ 他の女に渡すつもりの手紙を見ちゃったんだけど、もう私のところにはきてくれないの。
- ・ あやしいな、これ。他の女に手紙を送っちゃってるけど、まずいねえ。もう私の所に来てくれないのかな。
- ・ あやしいな。浮気相手にあげる手紙を見ると、私のところに来なくなって私は捨てられるのね。

● 嘆きつつひとり寝る夜のあくる間はいかに久しきものとかは知る

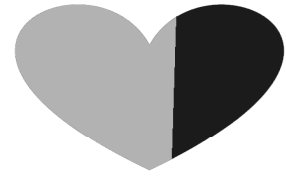
- ・ 悲しみながら、ひとりで寝る夜の間はどれほど長い間であるかと…。
- ・ 私が兼家様の来ない夜をこんなに悲しんでひとりで朝になるまで待っているのに、どうしてあなたは分かってくれないの。早く帰ってきて。
- ・ 悲しくてひとりで寝ている夜が明けていくまでの時間がどれだけ長いかわからないでしょうね。
- ・ 兼家様がいなくて、すごく淋しくて、毎日が遅く感じることも、なんにも分かっていないのね。

● げにやげに冬の夜ならぬまきの戸を遅くあくるはわびしかりけり

- ・ 本当に冬の夜は長くて寒くて、待っているのはとてもつらいよ。早く扉を開けてほしいな。
- ・ 本当に、冬の夜は長いから外で待っているのはつらいけれど、あなたが戸を開けてくれないのも同じくらいにつらいんだよ。
- ・ 冬の夜中みたいに長時間君の家の前で待っているのは本当につらいよ。

「うたがはし」の歌においては、作者が兼家の心中をどのように推し量っているのかを考えさせた。具体的には、兼家の心中を模式的にハートで示し、作者が、兼家の気持ちは自分と他の女（兼家が文を書いた女）のどちらにあると思っているのかを、色で塗り分けさせた。すると、生徒のほとんどが右の図①のように塗り分け、「兼家の心は、作者に対する気持ちより、他の女に対する気持ちの方が強まっている状態にある」と考えていた。そこで、図②と比較させ、なぜ自分が図②のように考えなかったのを生徒に説明させた。生徒からは「図②だと、作者は、兼家がすっかり心変わりしたと思っていることになる。この歌では、作者は、兼家が今現在心変わりしつつある状態だと思っている。」という答えが返ってきた。なぜそのように考えたのかをさらに聞くと、「助動詞『らむ』があるから。」という答えが返ってきた。そこで、助動詞「らむ」の働き（現在推量）について簡単に復習した。

図① 生徒の色分けの例



〔 淡色→他の女への気持ち
濃色→作者への気持ち 〕

図② 比較させた例



〔 淡色（他の女への気持ち）
のみになっている状態 〕

また、「嘆きつつ」の歌では、ほぼすべてのグループが、前頁の囲みにあるように、「いかに久しきものとかは知る」の部分を「あなたは分かってくれないのね」と訳していたため、なぜ「かは」を反語で解釈したのかを説明させた。生徒からは、「この場面では、作者の心中としては兼家を咎める気持ちが強いため、反語の解釈の方が合うと思った。」という答えが返ってきた。そこで、反語の働きについても簡単に復習した。

和歌を自分たちが日常的に使っている言葉で置き換える場面では、このようなやりとりを通して「自分の解釈はこれまでに学習してきた文法知識に支えられているのだ」と気付かせることで、「学んできた知識は読むことに生かせるのだ」と生徒が実感できるように務めた。

【第3次】兼家の作者に対する気持ちを考える。

「兼家が作者をどのように思っていたか」について、グループで約0.5時間程度で話し合った。

話し合いには生徒それぞれの価値観が表われており、興味深かった。「兼家が作者をどのように思っていたか」については、次のような意見が出された。

- ・ 一夫多妻制だから兼家にとって作者は複数いる妻の中のひとりなので、作者が兼家を思っている程には考えていないのではないかな。
- ・ 何回も求婚したが、手に入れたことで作者に対しての愛情が冷めてしまった(飽きた)ように思った。
- ・ 作者は和歌の才能があるが、嫉妬深く何かと疑ってくるから面倒だと思っている。
- ・ 他の女のところへ行っても、結果的に作者のところを訪れていたのだから、言い合いをしても彼女のことを思っていたのではないかな。

作者の立場を中心に置いて読解を進めていたとしたら、兼家を過度に非難するような見解も出てきたと思われるが、今回は単元の冒頭で、生徒から平安貴族の結婚形態や『大鏡』における兼家のエピソードとして自分が知っていることを挙げさせ、それらを意識させながら教科書掲載箇所までの場面、「うつろひたる菊」、「汧坏の水」という複数の場面を通して考えさせたことで、生徒は感情的にならず、多角的な視点を基に作品内容を理解することができた。「作者にとっては夫は一人だが、当時の貴族の男性、特に兼家のように権力を持った者からすると今回の行動は当然のものだ。」といった生徒の

発言も得られた。平安貴族の結婚形態や『大鏡』における兼家のエピソードなどに関する生徒の既習知識は、登場人物の心情について考察する際の視野を広げるのに有効であったと思われる。

グループでの話し合いは、生徒が疑問点などを遠慮なく話し合う機会となり、受け身になりがちな雰囲気改善することができた。自ら考える姿勢の重要性を再認識させられたのではないかなと思われる。しかし、若干ではあるが、話し合いに参加できず、聞き役に回っているだけの生徒もいた。例えば、グループ内での役割分担を工夫させるなどといった、全員を話し合いに参加させる工夫の必要性も感じた。

【授業後の生徒の感想】

- ・ 和歌が入る作品は心情がよく分かるので楽しく感じた。
- ・ 古文ではあったが、どこか遠い話に感じず、現代に置き換えられると思った。
- ・ 現代の女性は男性と対等になったが、この時代の女性は毎日、夫のことで心を悩ませてすごさなければならず、想像すると怖くなる。
- ・ 自分だけの視点から、自分の都合のよいことしか書かない日記は怖いものだと思う。
- ・ 作者はプライドの高い人物であったから、兼家が他の女性のところへ通うことを知り、辛くなってしまったのだろう。
- ・ 後世にまで残る作品となったこの日記を書いた作者は、相当気が強かったと思う。
- ・ 『蜻蛉日記』は読みやすく、内容の理解が容易であった。

「授業後の生徒の感想」からは、和歌が入った作品の学習に楽しさを感じた生徒（波線）や、作品世界を自分に引き付けて考えた生徒（二重波線）がいたことが分かる。

また、作品に対する評価（実線）を書いてきた生徒もいた。これは、作品を解釈する視野が既習知識によって広げられたことから引き出された気付きであると思われる。このような気付きは、古典のもつ価値への気付きにもつながり、そこから古典に対する興味・関心が生まれることも期待できる。

4 評価の例

読む能力の評価は、「うつろひたる菊」、「泔坏の水」を読み進めていく第2次に行った。文章を読解する学習場面において、文脈の流れをとらえた上で作者や登場人物の心情を考えられるかどうかを、生徒の発言や授業の様子を観察することで評価した。文脈の流れをとらえた上で作者や登場人物の心情を考えられている生徒を「おおむね満足できる」状況（B）とした。「努力を要する」状況（C）と判断した生徒には、他の生徒の意見を参考にさせながら前後の文脈から推測させたり、読解のポイントとなる文法事項等に気付かせたりするなどの手立てを、個に応じて行った。

知識・理解の評価は、主として第2次の「3首の和歌を自分たちが日常に使っている言葉で置き換える学習場面」を対象とし、授業後にワークシート②（資料3）の記述を確認することで評価した。自分たちの普段の言葉遣いで和歌の内容を表現できているものを「おおむね満足できる」状況（B）とした。ワークシート②記入例（資料3）は、自分たちの普段の言葉遣いで和歌の内容を表現できていることに加え、「ここやとだえにならんとすらむ」や「いかに久しきものとかは知る」の部分に、詠み手の心情を汲み取った説明を加えるという工夫をしていることから、事例実践校においては「おおむね満足できる」状況（B）の中でも優れたものであると判断し、「十分満足できる」状況（A）と見なした。「努力を要する」状況（C）と判断した生徒には、第1次で使用した「作者と兼家が結婚するまでの経緯の場面を現代語訳した資料」を活用させたり、和歌中の表現を自分たちの普段の言葉遣いに置きかえるとどのようになるのかをグループで話し合わせたりするなどの手立てを、個に応じて行った。

関心・意欲・態度の評価は、主として第3次の授業後に、ワークシート③（資料4）の記述を分析

することで評価した。兼家の作者に対する気持ちを多角的な視点から考察しようとしているものを「おおむね満足できる」状況（Ｂ）とした。ワークシート③記入例（**資料 4**）は「おおむね満足できる」状況（Ｂ）と見なすことのできる例である。「努力を要する」状況（Ｃ）と判断した生徒には、第１次で使った資料や本文を再度読みなおさせたり、他の生徒の意見を参考にさせたりするなどの手立てを、個に応じて行った。

5 成果と課題

（１）成果

本事例の成果としては、次のようなことが挙げられる。

ア 生徒がもっている既習の知識（古典作品の背景にある当時の文化や習慣に関する知識、既習作品に関する知識、文法に関する知識など）を文章の読みに生かす場を作ることができたこと

本実践では、本文の読解に入る前に、生徒から平安貴族の結婚形態や『大鏡』における兼家のエピソードについて自分が知っていること（学んできたこと）を挙げさせ、それらの事柄を意識させながら作品の読解を進めるようにした。また、和歌を扱う場面においては、自分の解釈がなぜそのようなになったのかを教師とのやりとりを通して考えさせる中で、自身が学んできた文法知識を使わせるように仕向けた。

生徒がもっている既習の知識を文章の読みに生かす場を、授業の中に設けるようにすることで、生徒は「自分が学んできた知識が役に立った」という意識を強めていき、そこから、古典を学ぶ楽しさが生まれることが期待できる。

イ 話し合いによる言語活動を通して学び合いができたこと

和歌の解釈は容易ではないが、グループで意見を出し合う中で、拙いながらも形を整えることができた。一人ではできないことも、グループで取り組むことで一つの形を作り出すことができ、学習に対する意欲の向上にもつながったと思われる。また、心情を話し合う場面でも、どのように言葉で表現するかをグループの中で意見交換することができた。生徒は学び合いの意義を感じていたようである。

（２）課題

課題としては、次のようなことが挙げられる。

ア 授業中の各作業や言語活動を行う目的を明確に生徒に示すこと

生徒の主体性を引き出し、自ら読むことを促すために、本実践では話し合う活動を取り入れた。しかし、話し合いにおいては、まれに教師の意図しない解答が出てくる可能性もあり、その場合の対応を柔軟にしていかなければならない。生徒たちは古典読解のための知識も多くはないので、感覚的に考えてしまう傾向もある。授業中の各作業や言語活動が何を目的としているのかを、生徒に丁寧に示す必要がある。

イ 学ぶ意欲を高める工夫

読んで分かるということは生徒の学ぶ意欲を高める上で重要なポイントである。分からせる（理解させる）ためには、授業の展開を入念に計画することが大切である。生徒の学ぶ意欲を喚起するため、生徒の実態に応じた適切な指導の工夫の必要性を痛感した。

使用教科書 ・『改訂版高等学校古典 古文編』第一学習社

参考文献 ・『ビギナーズ・クラシックス 蜻蛉日記』角川書店

蜻蛉日記

藤原道綱母

年 組 氏名

蜻蛉日記 1

○平安時代の貴族の結婚形態について知っていることを書こう。

★平安時代の結婚形態で、夫婦関係をうまく築くにはどうしたら良いか。男女のそれぞれの立場から考えてみよう。

○『蜻蛉日記』の作者は藤原兼家と結婚している。兼家は既習の歴史物語『大鏡』に登場したが、どのようなエピソードがあったか。また、どのような印象が残っているか。

○『蜻蛉日記』について

★便覧等を使い、どのような作品かを知ろう。

・作者 ……

・成立 ……

・内容等 ……

蜻蛉日記

藤原道綱母

年 組

蜻蛉日記 1

○平安時代の貴族の結婚形態について知っていることを書こう。

★平安時代の結婚形態で、夫婦関係をうまく築くにはどうしたら良いか。男女のそれぞれの立場から考えてみよう。

○『蜻蛉日記』の作者は藤原兼家と結婚している。兼家は既習の歴史物語『大鏡』に登場したが、どのようなエピソードがあったか。また、どのような印象が残っているか。

兄弟の仲が悪い。

○『蜻蛉日記』について

★便覧等を使い、どのような作品かを知ろう。

・作者 ……藤原道綱母

・成立 ……九七四年頃

・内容等…最初の女流日記文学

九五四〜九七四年の二十一年間についての記述

○『蜻蛉日記』の作者と兼家について

蜻蛉日記2

西暦(年号)	作者年齢	兼家年齢	出来事
九五四 (天曆八)	十九	二六	初夏、兼家が作者に求婚 秋、作者と兼家結婚
九五五 (天曆九)	二十		八月下旬、作者が道綱を出産 九月、兼家が町の小路の女に宛てた手紙を、 作者が発見 十月下旬、兼家三晩来ず
九五七 (天徳元)	二二		夏、町の小路の女、男子出産
九六六 (康保三)	三一		三月、兼家、作者邸で発病。後日、作者見舞 いに兼家邸へ 八月、兼家とのいさかい
九七四 (天延二)	三九		一月、去年の八月以来、兼家の訪れなしの記 述
『蜻蛉日記』以降			十月、兼家、右大臣に昇進 六月、兼家、摂政となる 一二月、兼家、太政大臣となる
九七八 (天元元)			兼家、閑白となる
九八六 (寛和二)			七月 兼家 没
九八九 (永祚元)			
九九〇 (正暦元)			
九九五 (長徳元)			作者 没

年 組 氏名

蜻蛉日記3

本文中の和歌を読む

※和歌の解釈（口語訳）を、皆さんの日常の言葉遣いを用いて書いてみよう。

○うたがはしほかに渡せるふみ見ればこやとだえにならんとすらむ

〈解釈〉

○嘆きつつひとり寝る夜あくる間はいかに久しきものとかは知る

〈解釈〉

★この歌を受け取った兼家の気持ちを想像してみよう。

「……そして、実際の返事は次の歌。」

○げにやげに冬の夜ならぬまきの戸を遅くあくるはわびしかりけり

〈解釈〉

年 組 氏名

蜻蛉日記3

本文中の和歌を読む

※和歌の解釈（口語訳）を、皆さんの日常の言葉遣いを用いて書いてみよう。

○うたがはしほかに渡せるふみ見ればこやとだえにならんとすらむ

〈解釈〉

あやしいな。浮気相手にあける手紙を見ると、私のところに来たかな。 (私は) 捨てられるんだろな。

○嘆きつつひとり寝る夜あくる間はいかに久しきものとかは知る

〈解釈〉

私が兼家さんに来ない夜とこんな悲しんで一人下
頼むるまで。後、いるのねどうして、兼家さんは、
早く帰るの？ 早く帰ってよ。

★この歌を受け取った兼家の気持ちを想像してみよう。

「……そして、実際の返事は次の歌。」

○げにやげに冬の夜ならぬまきの戸を遅くあくるはわびしかりけり

〈解釈〉

本当に、冬の夜は長いから外で待つのはつらいけど、
あなたが戸を開けてくれないのも、同じくらいに
つらいんだよ。

年 組 氏 名

○ 兼家は作者のことを、どのように思っていたでしょう。自分が兼家だったらと想像して、理由も含めて書いてみよう。

○ 『蜻蛉日記』の学習を通しての感想を書いてください。
良かったこと、気づいたことなどを自由に書いてください。

年 組 氏 名

蜻蛉日記 4

○ 兼家は作者のことを、どのように思っていたでしょう。自分が兼家だったらと想像して、理由も含めて書いてみよう。

作者は本多女でなかったから、そこまで作者を想っていたとは思わない。

兼家は権力もあつたからたくさん女性の好かれていたはずだから、その中で気に入つた程度の女性だったと思う。

○ 『蜻蛉日記』の学習を通しての感想を書いてください。
良かったこと、気づいたことなどを自由に書いてください。

和歌が途中に入る作品は、心情がよくわかるので楽しく感じた。

登場人物が少ないから読みやすかった。

事例 3

内容に即して筆者の心情や人物像を考えながら読む

1 ねらい

新学習指導要領の「古典B」の指導事項「(1) イ 古典を読んで、内容を構成や展開に即して的確にとらえること。」を指導の中心に取り上げる。「古典B」の言語活動例の「ウ 古典に表れた人間の生き方や考え方などについて、文章の表現を根拠にして話し合うこと。」を参考にして設定した、「筆者の心情や人物像を考え、話し合う」という言語活動を通して、古典を読んで、内容を構成や展開に即して的確にとらえるという言語能力を育成する。

この実践では、学習内容に対して納得をもって理解させることで、生徒が学ぶ楽しさを感じられるようにした。学習内容に対して納得をもって理解させるため、授業の中に、現代語訳をするだけであると、おそらく生徒が見過ごしてしまうような部分（筆者の心情の揺れ）を、ワークシートでの作業やグループでの話し合いによって丁寧に読みといていく学習場面を設けた。

2 学習活動の概要

(1) 単元名 随筆 『枕草子』－「二月つごもりごろに」－

(2) 単元の目標

- ①古典を読んで、内容を構成や展開に即して的確にとらえようとする。(関心・意欲・態度)
- ②古典を読んで、内容を構成や展開に即して的確にとらえる。(読む能力)
- ③古典に用いられている語句の意味、用法及び文の構造を理解する。(知識・理解)

(3) 取り入れる言語活動

筆者の心情や人物像を考え、話し合う。

(4) 単元の評価規準

関心・意欲・態度	読む能力	知識・理解
本文を構成や展開に即して的確にとらえて読む中で、内容に即して筆者の心情を考えようとしている。	本文を構成や展開に即して的確にとらえて読む中で、内容に即して筆者の心情を考えている。	形容詞の語幹の用法や絶対敬語など、読解に関わる主な文法事項について理解している。

(5) 指導と評価の計画（全4次）

次	学習活動	指導上の留意点	単元の評価規準と評価方法
1	●清少納言についてのイメージをもつ (1)清少納言の人物像を考え、発表する。	○以前に学習した『枕草子』の文章を基にして人物像を考えさせる。	
2	●本文の内容を把握し、読解に関わる主な文法事項を理解する (1)本文を音読する。 (2)現代語訳をしながら内容を把握する。 (3)形容詞の語幹の用法や絶対敬語など、読解に関わる主な文法事項を確認する。	○机間指導をする。 ○主語を補って訳させる。 ○筆者の心情を表す言葉に注意させる。	知識・理解 〔行動の観察〕
3	●内容に即して筆者の心情を考える (1)場面ごとに「筆者の心情」と「筆者がそのように感じた理由」をまとめる。はじめは個人で考え、途中からはグループで話し合いながらまとめる。〔ワークシート①〕〔資料1〕 (2)「内侍に奏してなさむ」とはどういう評価であるのかを考える。 (3)返答の評価を聞いた後の筆者の心情を想像し、発表する。〔ワークシート②〕〔資料2〕 ●「空寒み」の歌を理解する (1)「空寒み」という筆者の返答の何がすばらしいのかを考える。	○机間指導をする。 ○「内侍」とはどのような位であるのかを、国語便覧を使用して確認させる。 ○周囲の生徒と意見交換させる。 ○教科書の語注を使用し、説明する。	読む能力 〔ワークシート①の記述の確認〕
4	●筆者の人物像を考える (1)再度、清少納言の人物像を考える。〔ワークシート②〕〔資料2〕		関心・意欲・態度 〔ワークシート①、ワークシート②の記述の分析〕

3 授業の様子

【第1次】清少納言についてのイメージをもつ。

ここは単元の導入として0.5時間程度で実施した。

「清少納言の人物像を考える」場面では、中学校で学習した「春はあけぼの」、高校で学習した「木の花は」、「村上の先帝の御時に」、「雪のいと高う降りたるを」などを基にして、自分が抱いている清少納言のイメージを挙げさせた。生徒からは「プライドが高く負けず嫌いな才女」、「自分に自信がある」、「他人をよく観察していそう」、「紫式部と仲が悪そう」、「四季が好き」、「中国のものが好き」などの意見が出た。周囲と相談させたため少々時間がかかったが、活発に話し合っている様子が見られた。

【第2次】本文の内容を把握し、読解に関わる主な文法事項を理解する。

ここは約1.5時間をかけて展開した。

「現代語訳をしながら内容を把握する」場面では、主語を補いながら訳すように生徒に指示した。また、内容を理解する上で特にポイントとしたい文法事項（形容詞の語幹の用法や絶対敬語）については、その都度確認しながら読み進めた。

【第3次】内容に即して筆者の心情を考える。「空寒み」の歌を理解する。

ここは、ワークシートを使用しながら約1.5時間をかけて展開した。

まず、ワークシート①(資料1)を使い、内容に即して筆者の心情を整理した。筆者の心情の変化が分かるように、このワークシートは本文の五つの場面ごとに、筆者の「心情」と筆者がそのように感じた「理由」を整理するようにしてある。なお、「心情」は本文からの抜き出しになるが、本文の抜き出しだけでは理解できない生徒がいるかもしれないことにも配慮して、隣に現代語訳も書かせるようにした。

「心情」は大部分の生徒が問題なくワークシートに記入していた。机間指導をした際、記入できていない者が数名いたため、現代語訳を参照させ、心情を表す言葉(「思ひわづらふ」など)に注目するようにヒントを与えた。

「理由」については、行き詰って書けなくなる生徒がいることが予想されたため、グループで話し合いながらまとめさせた。グループによって多少差はあったが、おおむね活発に話し合っていた。次に挙げるのは、「理由」についての生徒の意見の例である。

- 「公任の宰相からの課題が来る」場面で、筆者が「思ひわづらひぬ」と感じた理由
 - ・公任は和歌の名手だから
 - ・公任は偉い人だから
 - ・今日の天気によく合っている上手な下の句だから
 - ・軽い気持ちで考えた句は返せないから
- 「殿上の間にいる人々が誰かわかる」場面で、筆者が「心一つに苦しき」と感じた理由
 - ・公任の他にも立派な人がそろっているから
 - ・下手な返事をしたら期待を裏切ることになるから
 - ・中宮定子の評価にかかわるから

● 『『空寒み…』という返事を書いて渡す』場面で、筆者が「わびし」と感じた理由

- ・自分の歌に自信がなかったから ・焦って投げやりに書いたので不安だったから
- ・中宮定子に相談できなかったから ・この答えによって自分の評価がどうなるかと思い、気になったから
- ・公任がどう思うか心配だったから ・この返答が中宮定子の評判にかかわるから

この後、授業ではワークシート②(資料2)を使い、「自分の返事の評価を聞いた後の筆者の心情」も想像して発表させた。「自分の返事の評価を聞いた後の筆者の心情」そのものは本文には書かれていないが、これを想像させることで、場面ごとに筆者の心情を整理してきた今までの学習の流れを発展させながら、「筆者の人物像を考える」という次の学習活動につなげることを意図した。生徒は自分が書いた内容を周囲と見せ合いながら、意見を交換していた。次に挙げるのは、「自分の返事の評価を聞いた後の筆者の心情」についての生徒の意見の例である。

- ・自分の歌を評価してくれてうれしい ・宰相をがっかりさせるような返事だと思われずよかった
- ・やっぱり私はすごかったんだ ・評価がよくって安心した。定子様も喜んでくれるでしょう。
- ・やはり私には才能があるんだわ

【第4次】筆者の人物像を考える。

ここはワークシート②(資料2)の後半部分を使いながら、約0.5時間程度で展開した。次に挙げるのは生徒から出てきた意見の例である。

- ・ イメージでは何でも自信をもってこなす人だったけれど、手がふるえるほど不安に感じることもあるのだなと思った。
- ・ とても才能のある人だけれど、同じようにプライドも強く、だけれども、意外と期待されると弱気になることもあるのだと思った。
- ・ 清少納言は頭が良く、中宮づきの女房であるから、プライドが高く、自分に自信をもっているような人だと思っていたけれど、ふるえながら返事を書いたことから、意外と普通の人だと思った。
- ・ 臨機応変に対応できる人。
- ・ 教養や実力があるので、ピンチをチャンスに変えられる人。
- ・ 意外と自分に自信がない。
- ・ 体裁を気にする人。
- ・ やはり賢い人。

生徒が清少納言に抱くイメージは、授業の冒頭と比べて、格段に具体的なものとなっている。二重波線のように、様々な一面をもつ等身大の人物として清少納言をとらえる見方が複数出てきたのは、ワークシートでの作業や話し合いを通して丁寧に作品を読みといていく学習の中で、作品の内容をしっかりと把握できたことによるものと判断できる。また、作品の内容をしっかりと把握できたことが、次のような「授業後の生徒の感想」につながったと思われる。

【授業後の生徒の感想】

- ・ 清少納言は落ち着いている人かと思ったけれど、焦っていて意外な一面が見られたので、面白かった。
- ・ 清少納言の意外な一面が見られたような気がして楽しかったし、他のエピソードにも興味をもった。
- ・ 私にとっては、今までの作品よりけっこう分かりやすかったと思う。
- ・ 最初はどのような話か全然分からなかったが、清少納言の心情などが分かり、最終的には本文の内容まで分かったのよかった。
- ・ 白居易は世界史でも習ったので、リンクしている感じがして楽しかった。
- ・ 学に対してとても評判がある人でも、期待にこたえられるだろうかというプレッシャーは常にあるのだと思った。でも、プレッシャーに打ち勝てた清少納言はすごい人だと思った。教養を身に付けることは大切なことだと感じた。
- ・ 自分が高く評価された出来事を文章にするのは、自慢したかったのだなと思った。様々な文章を知っているといろいろな面で役に立つなあと思った。
- ・ この「二月つごもりごろ」は『源氏物語』の次に心に残るお話だった。紫式部と清少納言はそれぞれが違う感じで、もっと二人の作品を読みたいと思った。
- ・ 「二月つごもりごろ」を学習して才能のある人は大変だなと思いました。しかし、どんな場合でも上手な歌を作ることができる人もすごいと思います。
- ・ 清少納言の心情が場面ごとにいろいろと変わっていくことに気付くことができ、おもしろかった。
- ・ 昔の人の季節を感じる心や、空を眺めたり、その空模様に合わせて歌を作ったりする美しい心に感動しました。どんな小さな美しいことでも、それを深く感じる心は、現代人にはないものだと思います。
- ・ 平安時代の作品は本当に漢詩を踏まえているものが多いんだなと思った。また、ほめられた話が多いという点も、清少納言は面白いと思った。
- ・ 空が暗くて雪が降っているのにもかかわらず、少し春がある感じがするなんて、どういうことだろうと思っていたが、清少納言の返しを聞いてなるほどと思えた。

生徒の感想から、才女のイメージがある清少納言にも意外な一面があることに面白さを感じた生徒が多数いることが分かった(波線)。また、作品内容に対して納得をもって理解をしたと思われる生徒(実線)や、古文が他の教科などに関わることがあることに気付いた生徒(二重波線)、「教養は身につけた方が良い」、「様々なことを知っている」と役に立つ、「他の古典作品を読みたい」などと感じた生徒(破線)などもいた。

4 評価の例

読む能力の評価は、主として第3次の授業後に、ワークシート①(資料1)の記述を確認することで行った。本文の内容を基にして筆者の心情を適切にまとめてあるものを「おおむね満足できる」状況(B)とした。ワークシート①記入例(資料1)は「おおむね満足できる」状況(B)と見なすことのできる例である。「努力を要する」状況(C)と判断した生徒には、心情を表す言葉(「思ひわづらふ」など)に注目させたり、現代語訳を基にしてその場面の状況を考えさせたりするなどの手立てを、個に応じて行った。

知識・理解の評価は主として第2次に行った。現代語訳をしながら内容を把握する学習場面において、文脈上の主語や、本文の内容を理解する上で特にポイントとしたい文法事項(形容詞の語幹の用

法や絶対敬語)を正確にとらえているかどうかを、生徒の発言や授業の様子を観察することで評価した。文脈上の主語や、本文の内容を理解する上で特にポイントとしたい文法事項(形容詞の語幹の用法や絶対敬語)を正確にとらえて現代語訳ができている生徒を「おおむね満足できる」状況(B)とした。「努力を要する」状況(C)と判断した生徒には、本文の内容を理解する上でポイントとなる文法事項に気付かせたり、文法書や辞書で調べさせたりするなどの手立てを、個に応じて行った。

関心・意欲・態度の評価は、主として第4次の授業後に、ワークシート①(資料1)やワークシート②(資料2)の記述を分析することで行った。本文で読み取った内容(ワークシート①(資料1)に整理した内容)を基にして筆者の心情や人物像をまとめようとしているものを「おおむね満足できる」状況(B)とした。3クラスで実施したが、大部分の生徒が筆者の心情や人物像をまとめることができた。ワークシート②記入例(資料2)は、本文から読み取った内容を基にして「筆者の人物像」がまとめられていることに加え、「自分の返事の評価を聞いた後の筆者の心情」が具体的に考えられていることから、事例実践校においては「おおむね満足できる」状況(B)の中でも優れたものであると判断し、「十分満足できる」状況(A)と見なした。「努力を要する」状況(C)と判断した生徒には、現代語訳を参照させたり周囲の生徒と話し合わせたりするなどの手立てを、個に応じて行った。

5 成果と課題

(1) 成果

本事例の成果としては、次のようなことが挙げられる。

ア 本文の内容に対して、生徒が納得をもって理解する場を作ることができたこと

今回の授業では、現代語訳をするだけであると生徒が見過ごしてしまうような「筆者の心情の揺れ」を、ワークシートでの作業や話し合いを通して丁寧にたどる学習場面を設けた。「授業後の生徒の感想」からは、生徒が、本文の内容に対して「分かった」と感じたり、本文の内容の理解の上に立って清少納言の心情の揺れを共感的に受け止めたりしていることが分かる。

本実践では、「筆者の心情の揺れ」を、ワークシートでの作業や話し合いを通して丁寧にたどる学習場面を設けたことで、生徒が納得をもって理解する場を作ることができたものと思われる。

イ 能動的に学習に取り組む姿勢が見られたこと

古典の学習において生徒は受け身の態度をとりがちであるが、今回の授業では、グループでの話し合いという言語活動を取り入れたことによって、積極的に話し合いに加わったりワークシートにまとめたりするなど、能動的に学習に取り組む様子が見られた。

(2) 課題

課題としては、次のようなことが挙げられる。

ア 読解を深める授業を継続していくこと

本文を現代語に訳すだけではなく、本文の読解を深める学習活動を授業の中に取り入れると、教材に対する生徒の理解も深くなる。そのため、現代文と同じように読解をする古典の授業を今後も続けていく必要がある。

使用教科書

『改訂版高等学校古典 古文編』第一学習社

二月つてもりごろに② 三年 (組) (番)

☆「内侍に奏してなきむ」とは、作者の返事に対してどう評価したのか。考えてみよう。

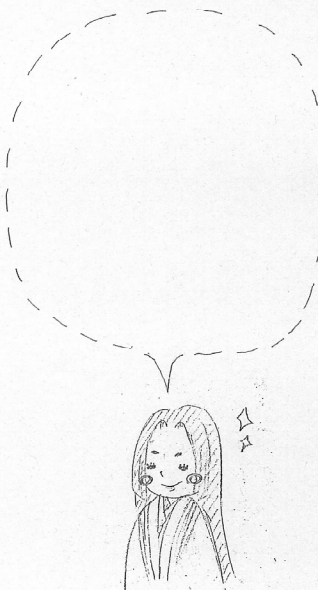
ステップ1 「内侍」とはどのような位なのか調べてみよう。

ステップ2 どう評価したのか。

清少納言の歌(上)の句は

☆ 自分の返事の評価を聞いて、作者はどう思ったか？ 清少納言のつもりで考えてみよう。

☆ この文章から、清少納言はどのような人物だと思ったか、書いてみよう。また、そのように思った理由も書いて。



ワークシート② 記入例

二月つてもりごろに② 三年

☆「内侍に奏してなきむ」とは、作者の返事に対してどう評価したのか。考えてみよう。

ステップ1 「内侍」とはどのような位なのか調べてみよう。

内侍
御侍り従五位上
それなりの高き位
清少納言は正式の官職ではない。
(天皇に仕える人)

ステップ2 どう評価したのか。

清少納言の歌(上)の句は、すばらしい
良い
優れている

☆ 自分の返事の評価を聞いて、作者はどう思ったか？ 清少納言のつもりで考えてみよう。

直後、い。褒めてもらえては、嬉しいわ。
30秒ほど。さすかは、私！
おへん、う。た！褒めてもらうええわ。
う。だ、枕草子にもこのことを書こう。

☆ この文章から、清少納言はどのような人物だと思ったか、書いてみよう。また、そのように思った理由も書いて。

プライドが高い(全体的に自分への評価が高い)
機転が利く(何々を、何を、何を)
知識が豊富
休養を欠にする(休まらなかつた、休まらなかつた)



3 学ぶ楽しさを生徒に実感させる古典の指導を目指して

(1) 指導の改善の方向性

古典を読み味わうためには、古典を理解するための基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けていなければならないことは言うまでもない。しかし、従来その指導を重視し過ぎるあまり、多くの古典嫌いを生んできたことも否めない。教師は、生徒の約7割が古典に対して苦手意識をもっているという現状を踏まえ、目の前の生徒に対して古典の授業をどのように展開するのかを、また、古典の授業では何をどこまで指導するのかを、振り出しに戻って考える必要があるのではないだろうか。

本研究では、古典に対する生徒の苦手意識を緩和し、古典の学習に前向きに取り組ませるための第一歩は、学ぶ楽しさを生徒が実感できる学習場面を授業の中に設けることにあると考えた。また、授業の中で学ぶ楽しさを生徒自身が実感することは、古典を学ぶ楽しさの発見に、ひいては、古典がもつ普遍的な価値への気付きにもつながり、そこから古典に対する興味・関心が高まることも期待できるのではないかと考えた。このようなことから、本研究では「学ぶ楽しさを実感させる授業」を以下のように構想した（再掲）。

- 学ぶ楽しさを生徒が感じることができるよう、授業の中に次のような学習場面を設ける
 - ・ 生徒が学習内容に対して納得をもって理解することができる学習場面
 - ・ 生徒が「学んできた知識を生かした」などというような実感をもつことができる学習場面

【授業の展開に関する留意事項】

- ・ 言語活動を通して、各科目における指導事項を指導すること
- ・ 近代以降の文章を扱うのと同様に、表現の仕方に注意したり、要約や詳述をしたり、想像力をはたらかせたりしながら読み味わい、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにしていくような展開を心がけること（語句の意味の理解や文の現代語といった、「文章の表面的な意味をとらえる学習」だけで終わらせないこと）

【教材に関する留意事項】

- ・ 生徒の実態や指導のねらいに応じては、現代語訳なども適切に利用すること

事例1は「国語総合」を想定した事例である。学習内容に対して納得をもって理解させるため、授業の中に、「調べ学習」、「調べた語句を用いての短文作り」という学習場面を設けた。「うつくし」「らうたし」の語義に合った短文を現代語で作るといった言語活動を通して授業を展開する中で、生徒が「うつくし」「らうたし」という古語に対するイメージを自分なりに固められたことが、「をかしげなるちごの、～かいつきて寝たる」の一文を、納得をもって理解することにつながった。「授業後の生徒の感想」からは、学習を通して「うつくし」「らうたし」という語句について納得をもって理解したことで、学習の楽しさを感じた生徒や、古典世界を身近なものとしてとらえ直した生徒がいたことが分かる。また、授業を通して古典作品に興味・関心を示した生徒もいた。

事例2は「古典A」を想定した事例である。学んできた知識を生かしたという実感をもたせるため、授業では、既習作品（『大鏡』）の学習を通して得た知識や自らの文法知識などを意識させながら読解を進めていくようにした。人物の心情を話し合うという言語活動を通して授業を展開する中で、自分も持っている知識によって、和歌の解釈が確かなものになったり人物の心情を考える際の視野が広

げられたりしたことで、生徒は「学んできた知識が役に立った」という実感をもつことができたと思われる。「授業後の生徒の感想」からは、和歌が入った作品の学習に楽しさを感じた生徒や、作品世界を自分に引き付けて考えた生徒がいたことが分かる。

また、**事例2**の「授業後の生徒の感想」には、「自分だけの視点から、自分の都合のよいことしか書かない日記は怖いものだと思う。」という「作品に対する評価」もあったが、これは、作品を解釈する視野が既習知識によって広げられたことから引き出された気付きであると見ることができる。このような気付きは、古典のもつ価値への気付きにもつながり、そこから古典に対する興味・関心が生まれることも期待できる。

事例3は「古典B」を想定した事例である。学習内容に対して納得をもって理解させるため、授業の中に、現代語訳をするだけであると、おそらく生徒が見過ごしてしまうような部分を、ワークシートでの作業やグループでの話し合いによって丁寧に読みといていく学習場面を設けた。話し合うという言語活動を通して授業を展開する中で、生徒は筆者の心情や人物像を考えることができた。「授業後の生徒の感想」からは、学習を通して本文の内容をしっかりと理解したことで作品内容に対するおもしろさを感じた生徒や、**事例1**と同様に、授業を通して古典作品に興味・関心を示した生徒がいたことが分かる。

どの事例においても、学習内容に対して生徒が納得をもって理解することができるような学習場面や、授業の中で「学んできた知識を生かした」などと生徒が実感できるような学習場面を設けるようにしたことが、学ぶ楽しさにつながっていたと見なすことができる。これらのことから、前頁に示した「学ぶ楽しさを生徒に実感させる授業」の枠組みは、学ぶ楽しさを生徒に実感させる授業を構想する方向性の一つとして、妥当なものであると判断できる。

また、各事例からは、生徒が学ぶ楽しさを感じるとともに、古典作品や作品世界を現代の自分たちの感覚や生活につながるものととらえて親しみを感じたり、授業で扱った古典作品自体にも興味・関心を抱いたりしたことも分かる。このことから、学ぶ楽しさを生徒に実感させる授業を積み重ねていくことは、古典に対する生徒の苦手意識を緩和し、古典に対する生徒の興味・関心を高めることにつながることも期待できる。

ただし、そこで大切なのは、学ぶ楽しさを生徒に実感させる授業を一過性のものにせず、毎日の指導において「積み重ねていく」ことである。この継続の中で、作品に蓄積されている様々な「知」や、その作品が古典として現代まで読み継がれてきた意味などに生徒自らが思い至ったとき、おそらく、生徒は古典がもつ普遍的な価値に気付くのであり、その気付きは生徒が生涯にわたって古典に対する興味・関心をもつことへの端緒となるはずである。

本研究の各事例の成果や課題から、学ぶ楽しさを生徒に実感させるための授業改善の方策としては、次のようなものが有効であったことが分かった。各校においては、生徒の実態に合わせて、各事例をアレンジしたり考え方を取り入れたりして御活用いただければ幸いである。

ア 学習内容に対して生徒が納得をもって理解することができる場を作る

学習内容に対して生徒が納得をもって理解することは、生徒に学ぶ楽しさをもたらす。言葉を掘り下げる学習活動を通して生徒に納得をもって理解させた**事例1**や、本文の丁寧な読みときを通して内容をしっかりと理解させた**事例3**の「授業後の生徒の感想」からは、生徒が学習内容に対しておもしろさを感じていることが分かる。

古典を扱う授業においては、「なぜ古典を学ばなければいけないのか」と素朴な疑問を抱く生徒もいる。古典を学ぶ意義を見いだせないそのような生徒もいるからこそ、古典を扱う授業において、学ぶ楽しさを実感させることは重要になる。

学習内容に対して生徒が納得をもって理解することができる場を、授業の中に設けるようにしたい。

イ 生徒がもっている既習の知識を文章の読みに生かす場を作る

古典作品の背景にある当時の文化や習慣に関する知識、既習作品に関する知識、文法に関する知識などというような生徒がもっている既習の知識を授業の中に生かす場があると、生徒は「学んできた知識を使えた」と実感することができる。**事例2**では、単元の冒頭で、生徒から平安時代の結婚形態や『大鏡』における兼平のエピソードについて自分が知っていること（学んできたこと）を挙げさせ、それらの事柄を意識させながら作品の読解を進めるようにした。和歌を扱う場面では、自分たちの解釈がなぜそのようになったのかを教師とのやりとりを通して考えさせる中で、自身が学んできた文法知識を使わせるように仕向けた。**事例2**の「授業後の生徒の感想」からは、和歌が入った作品の学習に楽しさを感じた生徒や、作品世界を自分に引き付けて考えた生徒がいたことが分かる。また、生徒の既習の知識を意識させながら読解を進めたことによって、登場人物の心情を考察する際の視野が広げられたり、文章の読み（特に、和歌の解釈）が確かなものになったりしたと思われる。

自分が学んできた知識は文章の読みに生かせるものなのだと実感することで、学ぶ楽しさが生まれることが期待できる。生徒がもっている既習の知識を文章の読みに生かす場を、授業の中に設けるようにしたい。

ウ 近代以降の文章を読むときと同様に、生徒が自分なりに文章と対峙する場を作る

「この作品はこう読むもの」などというような「作品に関する知識」は、作品を読む上での手掛かりを与えてくれることがある。しかし、作品を読む際にその知識にとらわれすぎると、それが逆に先入観となり、純粋に作品を読解することができなくなることもある。そのような状況に陥ると、文章を基にして自分なりの作品像を結ぶことはできない。自分なりの作品像を結ぶためには、自分でその文章と対峙することが欠かせない。

古典を扱う授業では、現代語訳自体はできるものの、訳した内容自体が「分からない」と感じる生徒もいる。だから、古典を扱う授業においては「現代語訳をしたら終わり」とするのではなく、近代以降の文章を読むときと同様に、学習活動を通して生徒が文章と対峙する場を、生徒の実態に合わせて設けることが必要である。授業の中にこのような場があると、文章に対する理解も深まることから、生徒は学習内容に対して納得をもって理解することができる。**事例3**では、現代語に訳すという「文章の表面的な意味をとらえる学習」だけであると、おそらく生徒が見過ごしてしまうであろう「筆者の心情の揺れ」を、ワークシートでの作業やグループでの話し合いを通して丁寧にたどらせた。この過程が、生徒が自分なりに文章と対峙する学習場面となり、生徒が学習内容に対して納得をもって理解することにつながった。

古典を扱う授業においても、近代以降の文章を読むときと同様に、生徒が自分なりに文章と対峙する場を、授業の中に設けるようにしたい。

エ 生徒が言語活動を通して学び合う中で、自分の考えを広げたり課題を乗り越えたりする場を作る

言語活動を通して学び合う中で、他者の見方に対して共感したり、疑問に思ったり、そこから新たな視点を得たりすることで、自分の考えは広げられられていく。また、生徒同士で教え合ったり説明し合ったりする中で、自分の理解が深まったり、自分だけで取り組んだとしたら乗り越えられない課題を、学び合いを通して乗り越えられたりもする。**事例 1**、**事例 2**、**事例 3** ではグループ活動による学び合いの中で、生徒は、一人で作業をしたら行き詰っていたかもしれない課題をやり遂げることができた。また、言語活動を通して学び合う中で、自分以外の見方や考え方があることに気付かせることもできた。

生徒同士が言語活動を通して学び合う中で、自分の考えを広げたり課題を乗り越えたりする場を、授業の中に設けるようにしたい。

4 古典を扱う授業を行う上での留意点

古典を扱う授業を行う上で、古典に対する生徒の苦手意識を緩和するために留意することが必要と思われる点について、以下に整理する。

ア 「教科書で教える」の発想に立って授業を構想すること

教科書とは、科目における指導事項を指導するための、いわば「素材」である。だから「教科書を教えるのではなく、教科書で教える」ことが大切である、などと言われる。しかし、古典を扱う授業の場では、文法的な説明や現代語訳に時間を割きすぎるあまりに、「教科書を教える」授業、すなわち、典型的な訓詁注釈の授業に陥ることも少なくない。

古典を読む力を育成するという視点に立てば、もちろん、訓詁注釈の学習は必要である。しかし、「訓詁注釈の学習が必要である」からといって、「古典を扱う学習が常に訓詁注釈の学習で完結してよい」ということにはならない。古典を扱う授業の内容が訓詁注釈に偏りすぎると、豊かな古典の世界に触れる前に、生徒を古典嫌いにしてしまうという結果をもたらしかねないからである。教師は、生徒の実態や指導の時期、指導事項のバランスなどを考慮しながら、「教科書で教える」の発想に立って指導のねらいを吟味しなければならない。

本研究の事例においては、例えば、**事例1**では古語を手掛かりにして文章を読み味わうことを、**事例2**では文章の読み取りを基にして登場人物の心情を考えることを、**事例3**では人物の心情を考えながら読むことを、それぞれねらいとした。「教科書で教える」の発想に立つと、指導のねらいは明確になる。指導のねらいが明確になると、「授業では何を中心にして指導するのか」、「授業では何を評価するのか」、さらには「授業ではどのような言語活動を取り入れるのがよいのか」などという、授業を構想する上で欠かせない要素の検討が進む。

古典を扱う授業においては、近代以降の文章を扱う授業と同様に、「教科書で教える」という発想に立って授業を構想することが求められる。そして、授業においては、文章の表面的な意味をとらえることだけで終わりとせず、文章を素材として、科目における指導事項を言語活動を通して指導していくことで、科目がねらいとする言語能力や資質を育成していくことが求められる。このことに関して、新学習指導要領解説国語編「国語総合」で次のように示されている。

〈C 読むこと (1) 指導事項 の解説部分より抜粋〉

古典の学習は、古文、漢文の現代語訳や文法的な説明に終始するものであってはならない。古典を読むことへの意欲を喚起するためには、古典を学ぶことの意義を認識させることが大切である。そのためにも、近代以降の文章と同様に、表現の仕方に注意したり、要約や詳述をしたり、想像力をはたらかせたりしながら読み味わい、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにしていくことが大切である。このような学習を通して、我が国の伝統的な言語文化に対する生徒の興味・関心が広がり、外国の言語文化を理解する心も養われていく。(下線は稿者による)

「国語総合」の土台の上に展開していく「古典A」や「古典B」においても同様に、教科書を素材として、科目における指導事項を言語活動を通して指導していくことで、科目がねらいとする言語能力や資質を育成していくことが求められる。

なお、「国語総合」、「古典A」、「古典B」の科目の目標や指導事項等については、第5章の(1)にまとめた。

イ 言語活動を通して、科目における指導事項を指導すること

古典を扱う授業では読むことの学習が中心になり、主として読む活動が行われる。しかし、読む能力は読む活動だけでは十分に身に付かない。話したり、聞いたり、書いたりする言語活動を通して指導することで、より効果的に読む能力をはぐくむことができる。

また、様々な言語活動を通して指導事項を指導していくことは、それが生徒の主体的な学習につながることから、授業改善のための手立てともなる。さらに、生徒同士による学び合いといった言語活動の場面では、生徒が達成感や成就感を感じやすいことから、生徒の学習意欲が喚起されることも期待できる。

本研究の事例では、読む学習の一環として話し合いによる言語活動が取り入れられている。どの事例からも、生徒同士が学び合う姿や、学習に対する主体的な取組を見ることができる。

言語活動を通して指導事項を指導することは、新学習指導要領においても引き続き重視されている。古典を扱う授業においても、言語活動を通じた指導を一層意識して取り入れることが求められる。

なお、授業における言語活動を考える際には、以下のような視点をもつ必要がある。

- 言語活動とは、あくまでも各教科等における指導事項を指導するための手立てであり、言語活動を行うこと自体がねらいではない。だから、「言語活動を通して指導する」という言い方がされるのである。国語の学習者の視点から換言すれば、「言語活動を通して言語能力を身に付ける」ということになる。
- 授業に取り入れる言語活動を考える際には、その言語活動が、育成する言語能力を身に付けるのにふさわしいかどうかという視点から検討する。例えば、数時間をかけて展開する大がかりな言語活動も、また、隣の席の者同士で3分で話し合ってみるといった短時間で完結する言語活動も、それが指導のねらいを達成するための、かつ、育成する言語能力を身に付けるのにふさわしい手立てであるのなら、言語活動に要する時間の多寡にかかわらず、そのどちらもが適切な言語活動である。
- 授業で言語活動を行う際には、それがどのような力を身に付けるための言語活動であるのかを、教師が自分で意識するだけでなく、生徒にも意識させることが大切である。両者がこの点を明確に意識することが、「活動はあるが指導はなかった」という教師の自省や、「何のためにその言語活動をやっているのかが分からなかった」などという生徒の不満に対処する手立てとなる。
- 学習の評価においては、言語活動ができているかどうかを表面的に評価するのではなく、身に付けさせたい言語能力が身に付いているかどうかを言語活動を通して評価する。

なお、言語活動を取り入れた指導については、「高等学校における教科指導の充実 国語科 新学習指導要領への対応 一言語活動の充実（１）」（H 22 年 3 月 栃木県総合教育センター）や、「高等学校における教科指導の充実 国語科 新学習指導要領への対応 一言語活動の充実（２）」（H 23 年 3 月 栃木県総合教育センター）なども参照されたい。

ウ 文法の学習は、文章の読みを確かなものにしたり深く読み味わったりするために行うこと

文法の学習は、文章の読みを確かなものにしたり深く読み味わったりするために行うものである。生徒にこの認識がないと、生徒にとっての文法の学習とは、おそらく、暗記することだけが目的化した「苦行」でしかない。「文法の学習で得た知識は、文章の読みに生かせるものなのだ」と生徒が実感できるような学習場面を、授業の中に作り出していくことが必要である。

そのためには、まず、文法の学習の必要性の有無を、生徒の実態に応じて適切に判断することから始めなければならない。そして、文法の学習を行うのであれば、授業で取り上げる文法事項をどれにするのか、また、そこで指導した内容を、以後に授業で扱う作品を読む中でどのように生かしていくのかなどを吟味する必要がある。さらに、授業においては、例えば、「文法の知識によって、文章の読みがこのように確かなものになる」、「文法の知識によって、このような読み味わいができる」などというように、「文法の知識は文章の読みに生かせるものなのだ」と生徒が実感できるような学習場面を作るよう、教師が配慮することも欠かせない。

本研究の事例においては、例えば、**事例2**の第2次の和歌を扱った学習場面は、教師とのやりとりを通して、生徒が文法の知識を基にして和歌の解釈を確かなものにしたり、また、和歌の解釈を通して文法の知識をとらえ直したりしていけるように配慮されている。このように、文法の学習においては、闇雲な文法の暗記だけに偏るのではなく、文法の学習と読みの学習とが途切れることなくスパイラルに影響し合うように配慮する必要がある。

このことに関して、新学習指導要領解説国語編「国語総合」、「古典B」で次のように示されている。

〈「国語総合」 伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項 (1)ア(イ)「文語のきまり、訓読のきまりについての事項」より抜粋〉

(イ)文語のきまり、訓読のきまりなどを理解すること。

(…略…)

生徒は、古典を読むのに必要な言葉のきまりの基礎的な事項について、中学校で学習している。ここでは、それを踏まえて指導する必要がある。

「文語のきまり」には文語文法のほか、歴史的仮名遣いなども含まれる。特に現代語と異なる古文特有のきまりに重点を置いて、仮名遣いや活用の違い、主な助詞、助動詞などの意味、用法、係り結び、敬語の用法の大体などについて指導し、古文を読むことの学習に役立つようにする。

「訓読」とは、元来中国の文語文である漢文を、国語の文章として読むことである。「訓読のきまり」とは、訓読に必要な返り点、送り仮名、句読点などに関するきまりをいう。これらのきまりについての指導は、教材の訓読に必要な範囲内で適切に行う必要がある。なお、訓読は、おおむね文語文法に沿った読み方をするが、普通の文語文法では扱われない訓読特有の伝統的な読み方もあることに注意する必要がある。

なお、内容の取扱いの(5)のイに示しているように、文語のきまり、訓読のきまりについては、詳細なことにまで及ぶことなく、読むことの指導に即して扱うとする考え方は従前と同様である。したがって、文語のきまりなどを指導するために、例えば、文語文法のみ学習の時間を長期にわたって設けるようなことは望ましくない。漢文の訓読のきまりの指導の場合も、同様である。

(下線は稿者による)

〈「古典B」 4 内容の取扱い (3)「文語文法の指導に関する事項」より抜粋〉

(3) 文語文法の指導は読むことの学習に即して行い、必要に応じてある程度まとまった学習もできるようにする。

(…略…)

「文語文法の指導は読むことの学習に即して行」うという考え方は従前と同様であり、文語文法の指導は、文章の読みを確かなものにしたり、深く読み味わったりするために行うという原則的な考えをここで明示している。

「必要に応じてある程度まとまった学習もできるようにする」としたのは、文語文法をある程度まとまった形で学ぶことを通して、一層古典に対する興味・関心を広げ、そのことが読むことの学習にも生かされるよう配慮したものである。そこで、生徒の実態に応じて、そのような学習の必要性の有無を適切に判断するとともに、文語文法の暗記に偏るなど、興味・関心を広げることがを軽視した指導に陥らないような配慮と工夫をする必要がある。

なお、漢文の訓読の指導に際しても、文語文法との関連に注意させる必要がある。

(下線は稿者による)

なお、「古典A」は、「古典等を読んで、我が国の伝統と文化に対する理解を深め、生涯にわたって古典に親しむ態度を育成すること」をねらいとする科目であり、新学習指導要領解説国語編「古典A」で次のように示されている。

〈「古典A」 4 内容の取扱い (2)「「古典A」の指導に当たって全般的に配慮すべき事項」より抜粋〉

(2) 古典を読む楽しさを味わったり、伝統的な言語文化に触れることの意義を理解したりすることを重視し、古典などへの関心を高めるようにする。

「古典を読む楽しさを味わ」うことは、生涯学習を視野に入れて学習する「古典A」において、特に留意すべき事項である。語句や文法、現代語訳の学習のために過度に時間を取られることで、豊かな古典の世界に触れる前に、生徒を古典嫌いにしてしまうことのないよう、教材や指導の方法を工夫し、古典の世界に楽しく触れることができる授業を展開し、生涯にわたって古典に親しむ態度を育成していく必要がある。(以降、略)

(下線は稿者による)

「古典A」の授業では、読み取りの学習を大切にしつつも、この科目の中心的なねらいが「我が国の伝統と文化に対する理解を深め、生涯にわたって古典に親しむ態度を育成すること」にあることを踏まえ、科目の特性に合った授業を展開していくことが求められる。

エ 現代語訳を適切に利用すること

書店に行けばいくらでも訳本は手に入るこの時代に、なぜ古典をわざわざ原文で学習するのかと言えば、それは原文からしか学べないものがあるからである。その意味において、原文は尊重されなければならない。

しかし、原文の古典を読むためには、古典を理解するための基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けていなければならない。そして、その指導を重視し過ぎるあまり、従来多くの古典嫌いを生んできた現状がある。

古典を扱う授業において、教材に関しては、古典の原文のみを取り上げるのではなく、生徒が理解しやすくなるように、生徒の実態に合わせて教材に工夫を凝らすことも必要である。例えば、原文の内容を理解させるには、「原文の現代語訳を与える」、「ポイントとなる箇所のみを現代語訳させ、その他の部分については現代語訳を与える」、「原文をすべて現代語訳させる」などのように様々なやり方がある。本研究の事例においては、例えば、**事例1**では原文（本文）の内容を理解させるために現代語訳を利用した。これは、**事例1**では「うつくし」「らうたし」という古語の語義や意味を理解し、その言葉を切り口にして文章を読み味うことを中心的な指導事項としたためである。このように、生徒の実態や指導のねらいに応じては、生徒に教材を理解しやすくさせるための工夫の一つとして、現代語訳を適切に利用することも考える必要がある。（なお、「適切に」の考え方については、以下の引用の破線参照。）このことに関して、新学習指導要領解説国語編「国語総合」、「古典B」で次のように示されている。

〈「国語総合」 4 内容の取扱い (6)教材に関する事項 「イ 古典の教材」より抜粋〉

イ 古典の教材については、表記を工夫し、注釈、傍注、解説、現代語訳などを適切に用い、特に漢文については訓点を付け、必要に応じて書き下し文を用いるなど理解しやすいようにすること。また、古典に関連する近代以降の文章を含めること。

古典の教材を理解しやすくするための配慮事項は、従前、「古典」に示していたが、今回の改訂では「国語総合」に示している。

古典の教材としての古文と漢文を理解しやすくし、親しみやすくするためには、学習に際して読みにくい漢字や熟語に読み仮名を付けたり、難解な部分には、注釈、傍注、解説、現代語訳などを適切に用いたりする配慮が必要となる。言うまでもなく、古典の学習において原文は尊重される必要がある。したがって、例えば現代語訳などを取り上げるにしても、おのずと適切な範囲はあり、原文とのかかわりにおいて取り上げることが大切になる。具体的には、原文と対比できるように現代語訳などを取り上げたり、原文の前後を現代語訳などで補ったり、原文と同一の文種や形態に属する他の文章や作品を現代語訳などで取り上げたりすることなどが考えられる。このように、現代語訳などを活用しつつ、それらを通して、古典そのものに対する興味・関心を広げていくよう配慮することが大切である。

(…略…)

古典を読み味わうためには、古典を理解するための基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けていなければならないことは言うまでもない。しかし、従来その指導を重視し過ぎるあまり、多くの古典嫌いを生んできたことも否めない。そこで、指導においては、古典の原文のみを取り上げるのではなく教材にも工夫を凝らしながら、古人のものの見方、感じ方、考え方に触れ、それを広げたり深めたりする授業を実践し、まず、古典を学ぶ意義を認識させ、古典に対する興味・関心を広げ、古典を読む意欲を高めることを重視する必要がある。そして、そのような指導を通し

て、古典を理解するための基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けさせていくことが大切である。
(下線は稿者による)

〈「古典B」 3 内容 (1)「ア 語句の意味、用法及び文の構造を理解することに関する指導事項」より抜粋〉

ア 古典に用いられている語句の意味、用法及び文の構造を理解すること。

(…略…)

言語面での抵抗を少なくし、古典の言葉に対する理解を深めるためには、現代語訳や辞書などを適切に活用したり、現代の言葉と比較対照したりするなどの指導をする必要がある。特に、文章を読む中で、文脈に即して意味や用法を習得させる指導や、書き手の意図や文章中の人物の心情などを、語句を手掛かりに場面や状況の展開からの確に読み取り、作品の理解につなげていく指導を工夫することが大切である。(以後、略)
(下線は稿者による)

なお、「古典A」は、古典としての古文と漢文、古典に関連する文章を読む対象とした科目であり、そこで言う「古典に関連する文章」とは、古典の現代語訳、古典について解説した近代以降の文章や、古典を素材にしたり翻案したりした近代以降の文章などのことである。新学習指導要領解説国語編「古典A」で次のように示されている。

〈「古典A」 2 目標 の解説部分より抜粋〉

古典を読むためには古典についての知識及び技能を確実に身に付けていくことが望まれるところであるが、^{くんこちゅうしやく}訓詁註釈に偏った古典の授業が古典の学習に意義を見いだせない生徒を生まないよう、古典を読む意欲をまず高めることが何よりも大切である。そこで、教材や指導方法を工夫し学習意欲を高める取組の中で、知識及び技能も身に付けさせていくようにする必要がある。

(下線は稿者による)

「古典A」の授業においては、読み取りの学習を大切にしつつも、多様な手段を効果的に用いて、古典の世界に触れさせ、生徒の古典に対する興味・関心を高めていくことが求められる。

5 参考資料

(1) 「国語総合」「古典A」「古典B」における古典の指導

以下、古典を教材として扱う科目である「国語総合」「古典A」「古典B」の科目の目標及び指導事項を整理する。古典を扱う授業においては、これらの科目の趣旨にあった授業展開を考えることが必要である。

ア 「国語総合」

●科目の目標

国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を伸ばし、心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。

●古典の学習に関わる指導事項

C 読むこと

(1)ア 文章の内容や形態に応じた表現の特色に注意して読むこと。

イ 文章の内容を叙述に即して的確に読み取ったり、必要に応じて要約や詳述をしたりすること。

ウ 文章に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み味わうこと。

エ 文章の構成や展開を確かめ、内容や表現の仕方について評価したり、書き手の意図をとらえたりすること。

オ 幅広く本や文章を読み、情報を得て用いたり、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにしたりすること。

〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕

(1)ア(ア) 言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について気付き、伝統的な言語文化への興味・関心を広げること。

(イ) 文語のきまり、訓読のきまりなどを理解すること。

イ(ア) 国語における言葉の成り立ち、表現の特色及び言語の役割などを理解すること。

「国語総合」は総合的な言語能力を育成することを目指した科目であり、その指導に当たっては、話すこと・聞くこと、書くこと及び読むことの言語活動を相互に密接な関連を図りながら実践していくことが必要である。したがって、「国語総合」における古典の指導においても、例えば、話したり書いたりする表現活動を古典の文章を読むことと関連させて行ったり、課題についてそれぞれの考えをまとめ、その成果を発表したりするなどの多様な言語活動を、適切な指導と評価の計画の下に実践していくなど、指導上の工夫が大切となる。

古典の教材に関しては、原文のみを取り上げるのではなく、生徒の実態に応じては、学習に際して読みにくい漢字や熟語に読み仮名を付けたり、難解な部分には注釈、傍注、解説、現代語訳などを適切に用いたりする配慮が必要である。また、古文と漢文が均衡を欠いたりすることがないように、教材は偏りなく選定することになっている。

授業においては、古人のものの見方、感じ方、考え方に触れ、それを広げたり深めたりする授業を実践し、まず、古典を学ぶ意義を認識させ、古典に対する興味・関心を広げ、古典を読む意欲を高めることを重視する必要がある。

イ 「古典A」

●科目の目標

古典としての古文と漢文、古典に関連する文章を読むことによって、我が国の伝統と文化に対する理解を深め、生涯にわたって古典に親しむ態度を育てる。

●指導事項

(1)ア 古典などに表れた思想や感情を読み取り、人間、社会、自然などについて考察すること。

イ 古典特有の表現を味わったり、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解したりすること。

ウ 古典などを読んで、言語文化の特質や我が国の文化と中国の文化との関係について理解すること。

エ 伝統的な言語文化についての課題を設定し、様々な資料を読んで探究して、我が国の伝統と文化について理解を深めること。

「古典A」は我が国の伝統と文化に対する理解を深め、生涯にわたって古典に親しむ態度を育成することを目指した科目であり、その指導に当たっては、生徒が古典を読む楽しさを味わったり、伝統的な言語文化に触れることの意義を理解したりすることを通して、古典などへの関心を高めていけるよう、配慮することが必要である。したがって、「古典A」における古典の指導においては、語句や文法、現代語訳の学習のために過度に時間を取られることで、豊かな古典の世界に触れる前に生徒を古典嫌いにしてしまうことのないよう、教材や指導の方法を工夫し、古典の世界に楽しく触れることができる授業を展開することが大切となる。また、我が国の伝統と文化について理解を深める学習においては、生徒自身に考えさせたり探究させたりする学習活動が重要なものとなる。

授業で扱う教材に関しては、古典や、古典に関連する近代以降の文章も含め、まとまりのある文章を中心に上げる。その際には、指導のねらい、生徒の興味・関心、指導の段階や時期などに配慮し、親しみやすく効果的なものを教材として用いることが大切である。また、生徒の実態や興味・関心などに応じて内容の取扱いに幅をもたせ、指導上の様々な工夫ができるよう、古文と漢文の両方を取り上げて指導してもよいし、古文だけ若しくは漢文だけを取り上げて指導してもよいことになっている。

授業においては、古典や古典に関連する文章を読むことを通して、古典の中の人間の生活や人生を知り、そこから自らの生き方を見つめ直すとともに進むべき方向を模索しようとする態度や、古典などの表現から自らの思考や感情を表現する様々な方法を見だし、表現に生かそうとする態度などを育成することに留意することが大切である。

ウ 「古典B」

●科目の目標

古典としての古文と漢文を読む能力を養うとともに、ものの見方、感じ方、考え方を広くし、古典についての理解や関心を深めることによって人生を豊かにする態度を育てる。

●指導事項

(1)ア 古典に用いられている語句の意味、用法及び文の構造を理解すること。

イ 古典を読んで、内容を構成や展開に即して的確にとらえること。

ウ 古典を読んで、人間、社会、自然などに対する思想や感情を的確にとらえ、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにすること。

エ 古典の内容や表現の特色を理解して読み味わい、作品の価値について考察すること。

オ 古典を読んで、我が国の文化の特質や我が国の文化と中国の文化との関係について理解を深めること。

「古典B」は、古典を読む能力を養うとともに、思考力を伸ばし、感性や情緒をはぐくみ、古典を通して人生を豊かにする態度を育成することを目指した科目であり、その指導に当たっては、古典を読む能力を養うとともに、生徒が古典についての理解や関心を深めていけるよう、配慮することが必要である。したがって、「古典B」における古典の指導においては、語句の意味の理解や文の現代語訳といった文章の表面的な意味をとらえる学習だけで終わらせず、内容の理解の上に立って、生徒が豊かな古典の世界に触れ、自身のものの見方・感じ方・考え方を広げ深めていけるよう、授業の展開を工夫していくことが大切となる。

授業で扱う教材に関しては、生徒の発達の段階や指導の時期に即応して、長短難易様々なものをバランスよく取り上げ、その配列を工夫するなどの配慮が必要である。また、古文と漢文は両方を取り上げることになっている。古文と漢文のいずれか一方に多くの時間をかけたり、取扱い方に深淺が生じたりすることがないように配慮し、全体としてバランスよく指導する必要がある。

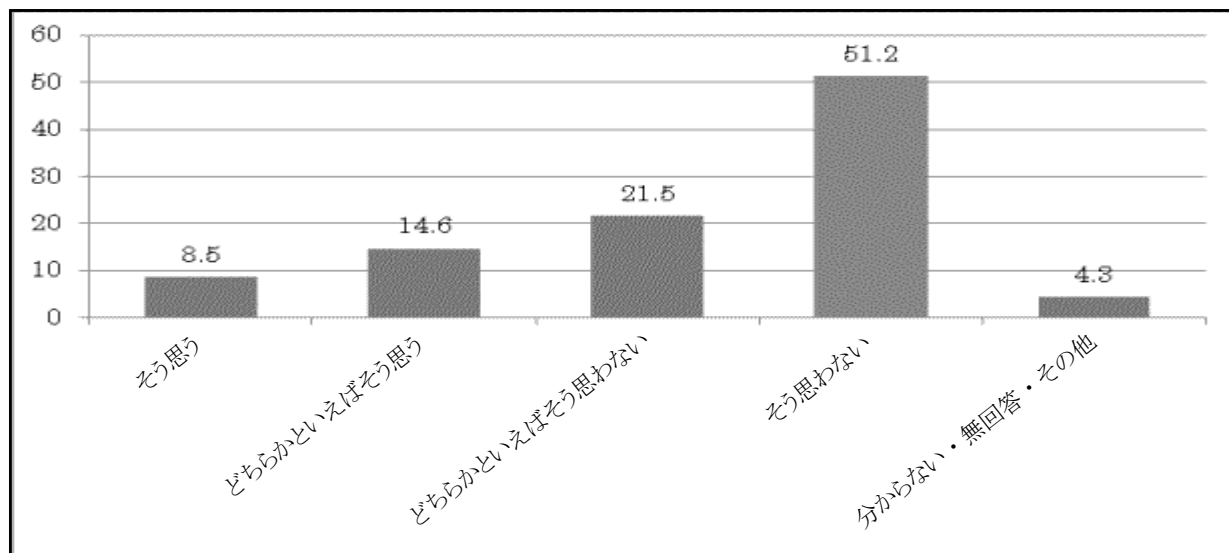
授業においては、生徒自身が古典の価値について考えを深め、我が国の伝統や文化などについて考えを深めていけるよう、留意することが大切である。

(2) 平成17年度教育課程実施状況調査「生徒質問紙調査」「教師質問紙調査」における、古典に対する
生徒・教師の意識

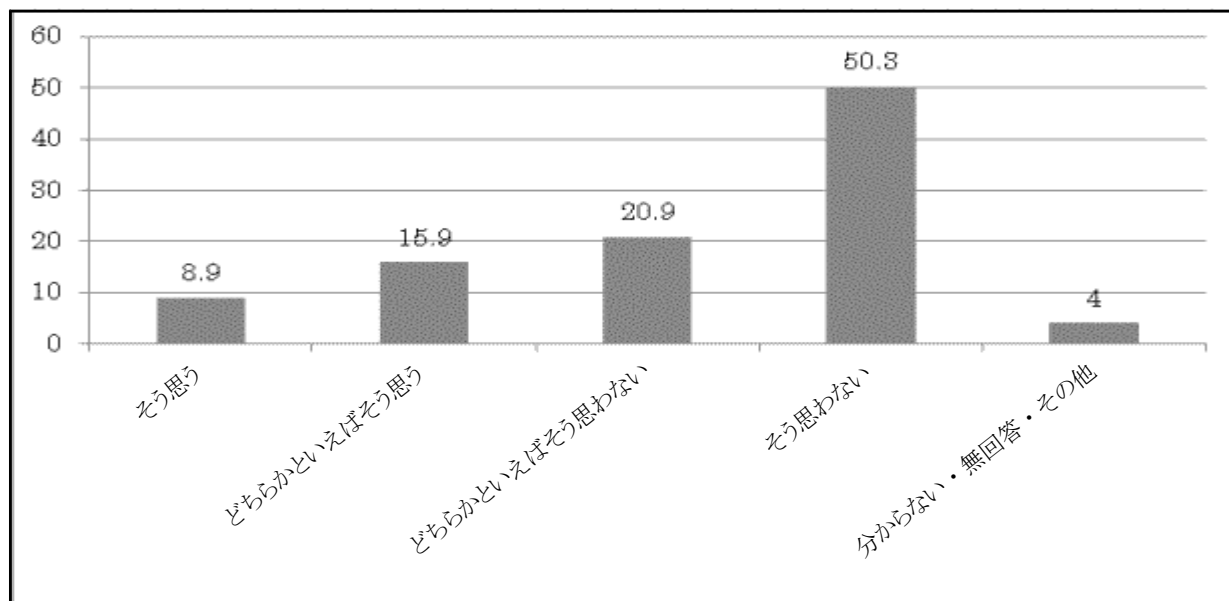
高校における古典の指導を取り巻く現状を知る資料の一つに、平成17年度教育課程実施状況調査※1がある。この調査における「生徒質問紙調査」「教師質問紙調査」の回答から、生徒や教師が、古典の授業に対してどのような意識を抱いているのかが分かる項目を整理したものが、以下である。

【「生徒質問紙調査」より】

●「古文は好きだ」という質問に対しての生徒の回答（数字は%で表した）



●「漢文は好きだ」という質問に対しての生徒の回答（数字は%で表した）



※1 平成17年11月10日実施。調査対象は国・公・私立高等学校(全日制課程)(中等教育学校の後期課程を含む)の第3学年。無作為抽出。全員が履修している科目の場合、1科目1問題冊子あたり、生徒1万6千人が調査対象となるよう、原則1学科2学級を抽出して実施された。

【「生徒質問紙調査」より】

- 「調査時点までに文語文法を指導している」と答えた教師※₂に指導を受けている生徒のうち、「文語文法を理解すること」に対して、

- ・「よく分かった」と回答した生徒は17.2%、「よく分からなかった」と回答した生徒は36.3%であった。（「無回答」・「その他」は46.4%）
- ・「好きだった」と回答した生徒は12.9%、「きらいだった」と回答した生徒は49.4%であった。（「無回答」・「その他」は37.7%）
- ・「普段の生活や社会生活の中で役に立つと思った」と回答した生徒は32.9%、「役に立つと思わなかった」と回答した生徒は22.4%であった。（「無回答」・「その他」は44.7%）

- 「調査時点までに漢文の訓読の仕方を指導している」と答えた教師※₃に指導を受けている生徒のうち、「漢文の訓読の仕方を理解すること」に対して、

- ・「よく分かった」と回答した生徒は24.2%、「よく分からなかった」と回答した生徒は31.5%であった。（「無回答」・「その他」は44.3%）
- ・「好きだった」と回答した生徒は20.9%、「きらいだった」と回答した生徒は43.8%であった。（「無回答」・「その他」は35.3%）
- ・「普段の生活や社会生活の中で役に立つと思った」と回答した生徒は19.9%、「役に立つと思わなかった」と回答した生徒は37.3%であった。（「無回答」・「その他」は42.8%）

【「教師質問紙調査」より】

- 「調査時点までに文語文法を指導している」と答えた教師※₂のうち、「文語文法を理解すること」に対して、

- ・「生徒にとって理解しやすい」と回答した教師は6.1%、「生徒にとって理解しにくい」と回答した教師は71.1%であった。（「無回答」・「その他」は22.9%）
- ・「生徒は興味を持ちやすい」と回答した教師は4.4%、「生徒は興味を持ちにくい」と回答した教師は53.7%であった。（「無回答」・「その他」は41.9%）

- 「調査時点までに漢文の訓読の仕方を指導している」と答えた教師※₃のうち、「漢文の訓読の仕方を理解すること」に対して、

- ・「生徒にとって理解しやすい」と回答した教師は34.4%、「生徒にとって理解しにくい」と回答した教師は34.6%であった。（「無回答」・「その他」は30.9%）
- ・「生徒は興味を持ちやすい」と回答した教師は34.4%、「生徒は興味を持ちにくい」と回答した教師は25.3%であった。（「無回答」・「その他」は40.3%）

※₂ 「調査時点までに文語文法を指導している」と答えた教師の割合は、調査対象となった全国語教師の97.9%であった。

※₃ 「調査時点までに漢文の訓読の仕方を指導している」と答えた教師の割合は、調査対象となった全国語教師の99.8%であった。

これらの回答から分かるのは、生徒や教師が古典の授業に対して抱いている意識のうちの一部である。しかし、この回答だけをとってみても、生徒が古典の学習に対して強い苦手意識を抱いていることは十分に分かる。一方、教師の側も、文語文法や漢文の訓読の仕方は生徒にとって「理解しにく」く「興味を持ちにくい」ものであると、問題意識をもっていることが分かる。

（３）小・中学校における「伝統的な言語文化」を扱う授業

従前の学習指導要領では、小・中学校の国語科の内容は「Ａ 話すこと・聞くこと」、「Ｂ 書くこと」、「Ｃ 読むこと」の３領域及び〔言語事項〕で構成されており、古典作品を授業で扱う際には以下のような指導が行われた。

●小学校

古典作品を教材として

- ・ 「Ｃ 読むこと」の指導事項を指導する。
- ・ 第５・６年においては「言語事項」「エ 文語調の文章に関する事項」の（ア）「易しい文語調の文章を音読し、文語の調子に親しむこと」として、３領域の指導を通して指導する。

●中学校

古典作品を教材として「Ｃ 読むこと」の指導事項を指導する。

つまり、従前の学習指導要領においては、授業で教材として古典作品を扱ってはいても、その授業は主として「読むこと」の指導の一環として行われるものであり、古典作品に表現された様々な思想や感情などを取り上げる指導は、しにくい状況があった。

新学習指導要領では、小・中学校の国語科の内容は「Ａ 話すこと・聞くこと」、「Ｂ 書くこと」、「Ｃ 読むこと」の３領域と〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕に改められた。この〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕は、従前の学習指導要領における〔言語事項〕で指導していたことと、新設された「伝統的な言語文化」とで構成される。この「伝統的な言語文化」に、古典は含まれる。「伝統的な言語文化」を扱う授業では以下のような指導が行われる。

●小学校

古典作品などを教材として、「Ａ 話すこと・聞くこと」、「Ｂ 書くこと」及び「Ｃ 読むこと」の各領域の指導を通して以下の事項を指導することを基本とする。

なお、知識・技能の定着を図るために、まとめて単元化して扱ったり、特定の時間を確保して繰り返し指導したり、学期や学年を超えて指導したりすることもできる。ただし、特定の事項をまとめたり繰り返したりする学習は、形式的・機械的な学習になりやすいので、児童が興味や関心をもって学習を継続できるような工夫が大切である。

小学校第１学年及び第２学年	小学校第３学年及び第４学年	小学校第５学年及び第６学年
ア 昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること。	ア 易しい文語調の短歌や俳句について、情景を思い浮かべたり、リズムを感じ取りながら音読や暗唱をしたりすること。 イ 長い間使われてきたことわざや慣用句、故事成語などの意味を知り、使うこと。	ア 親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章について、内容の大体を知り、音読すること。 イ 古典について解説した文章を読み、昔の人のものの見方や感じ方を知ること。

●中学校

古典作品などを教材として、「A 話すこと・聞くこと」、「B 書くこと」、「C 読むこと」の指導を通して以下の事項について指導する。

なお、古典に関する基礎的・基本的な内容、言葉の性質の類似性や系統性などについて、生徒の興味・関心や学習の必要に応じ、ある程度体系付けてまとめた知識を得させるような指導もできる。

中学校第1学年	中学校第2学年	中学校第3学年
ア 文語のきまりや訓読の仕方を知り、古文や漢文を音読して、古典特有のリズムを味わいながら、古典の世界に触れること。 イ 古典には様々な種類の作品があることを知ること。	ア 作品の特徴を生かして朗読するなどして、古典の世界を楽しむこと。 イ 古典に表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いなどを想像すること。	ア 歴史的背景などに注意して古典を読み、その世界に親しむこと。 イ 古典の一節を引用するなどして、古典に関する簡単な文章を書くこと。

「伝統的な言語文化」の指導は、小・中学校のどちらにおいても3領域を通して指導することが基本ではあるが、知識をまとめて指導したり、繰り返して指導したりすることが必要なものについては、特にそれだけを取り上げて指導することもできる。また、「伝統的な言語文化」が設けられたことにより、必要であれば古典作品に表現された様々な思想や感情などを取り上げる指導にも踏み込めるようになった。

このように、今回の改訂では、小・中学校においても古典を教材とする指導が充実されることになる。しかし、それは、高等学校で行っていた古典の指導を小・中学校で前倒しして行うということではない。小・中学校における「伝統的な言語文化」の指導の主眼は、あくまでも「我が国の言語文化に親しむ態度を育てたり、国語の役割についての理解を深めたり、豊かな言語感覚を養ったりすること」にある。そして、これらの指導が目指すのは、我が国の言語文化を享受し継承・発展させるため、生涯にわたって古典に親しむ態度を育成することであり、小・中学校での指導を通して生徒に育まれてきたそれらの資質は、高等学校における古典の指導を通してさらに高めていくことになる。

(4) 新学習指導要領における国語科改訂の要点

ア 国語科の目標

国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を伸ばし、心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。

高等学校国語では、今回の改訂においても言語の教育としての立場を重視し、社会人として生きるために必要とされる国語の能力の基礎を身に付けるという基本的な理念を継承している。したがって、教科の目標については、小学校及び中学校との系統性を重視するため、想像力を伸ばすことについての記述を新たに加えているほかは、これまでと同様である。

イ 高等学校国語科の改善に関する具体的事項

●中学校までに培われた国語の能力を更に伸ばし、社会人として必要とされる国語の能力の基礎を身に付けることができるようにするとともに、生徒一人一人の能力・適性、興味・関心に応じた多様な学習が行われるよう、各科目の構成及び内容を次のように改善する。

(ア)「**国語総合**」は、現行の「国語総合」の内容を改善したものとする。実社会で活用できる国語の能力を身に付けるため、話すこと・聞くこと、書くこと及び読むことの学習が総合的に行われるよう、内容を改善する。

その際、特に、文章や資料等を的確に理解し、論理的に考え、話したり書いたりする能力を育成することや、我が国の言語文化を享受し継承・発展させる態度の育成を通して、感性や情緒をはぐくむことを重視する。

(イ)「**国語表現**」は、現行の「国語表現Ⅰ」及び「国語表現Ⅱ」の内容を再構成したものとする。「国語総合」の学習を踏まえ、文章や資料等を的確に理解し、論理的に考え、適切に話したり書いたりする力など、実社会で活用することのできる表現の能力を確実に育成するとともに、進んで表現する意欲や現代の国語の向上を図る態度をはぐくむようにする。

(ウ)「**現代文A**」は、近代以降の文章を対象とし「古典A」と対をなす科目として新設する。「国語総合」の学習を踏まえ、生涯にわたって日常的に読書に親しむ態度をはぐくむ。関連して、言語生活の在り方、言語の役割、国語の特質等についても指導し、我が国の言語文化に対する理解ができるようにする。

(エ)「**現代文B**」は、現行の「現代文」の内容を改善したものとする。「国語総合」の学習を踏まえ、近代以降の様々な種類の文章や資料を教材として取り上げ、話すこと・聞くこと、書くこと及び読むことの言語活動を通して、読む能力のみならず、読んだことをもとにして考え、判断・評価し、それをまとめて論理的に表現する能力を育成するとともに、文字・活字文化に対する理解が深まるようにする。

(オ)「**古典A**」は、現行の「古典講読」の内容を改善したものとする。「国語総合」の学習を踏まえ、古典の原文（近代以降の文語調の文章を含む）のみならず、古典についての解説文や小説、随筆なども教材として幅広く取り上げ、古典の世界に親しむ態度をはぐくむ。関連して、言語の役割、国語の成り立ちや特質についても指導し、我が国の言語文化に対する理解ができるようにする。

(カ)「古典B」は、現行の「古典」の内容を改善したものとする。「国語総合」の学習を踏まえ、古典の原文や、古典についての評論文などを教材として取り上げ、話すこと・聞くこと、書くこと及び読むことの言語活動を通して、系統的に古典に接することができるようにし、古典に対する関心と知識を高め、古典を読む能力を育成する。

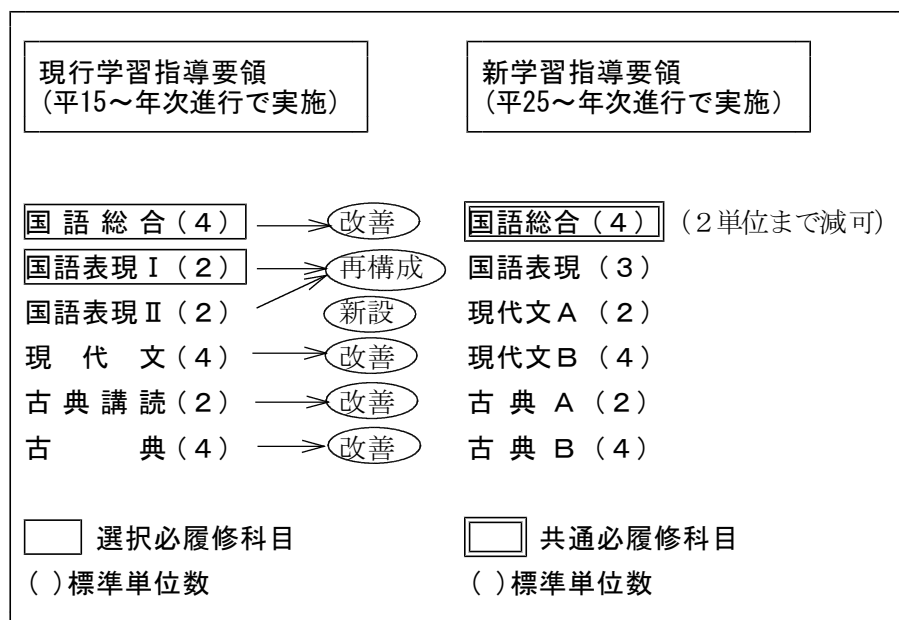
ウ 科目構成の改善

これまでの「国語表現Ⅰ」、「国語表現Ⅱ」、「国語総合」、「現代文」、「古典」及び「古典講読」の6科目から成る構成が、「国語総合」、「国語表現」、「現代文A」、「現代文B」、「古典A」及び「古典B」の6科目から成る構成となった。このうち、総合的な言語能力を育成する「国語総合」が共通必修科目となり、他の5科目は、「国語総合」の内容を、科目の性格、特色に応じて発展させた選択科目となった。

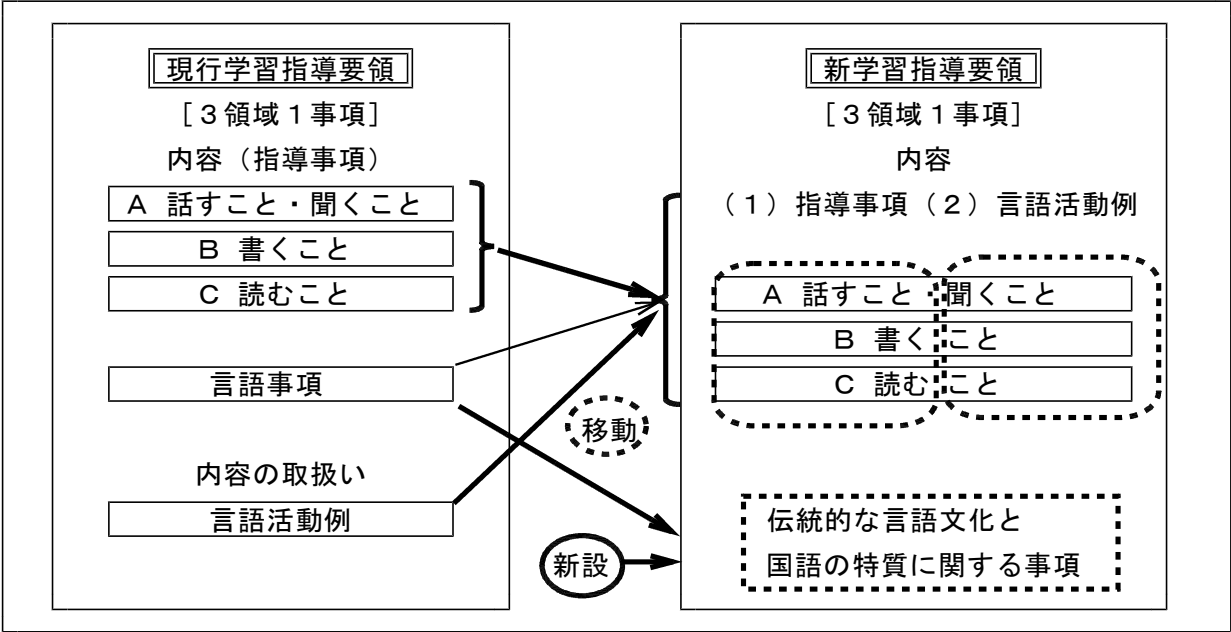
今回の改訂で共通必修科目を置くこととなったのは、答申において「学習の基盤であり、広い意味での言語を活用する能力とも言うべき力を高める国語、数学、外国語については、現在選択必修となっているが、義務教育の成果を踏まえ、共通必修科目を置く必要がある。」と提言されたことによる。この趣旨を踏まえ、「国語総合」が共通必修科目となった。これにより、高等学校国語において指導する内容の共通性を重視することとなった。

表現に関する科目が1科目となったのは、「国語総合」との関係を整理し再構成したためである。また、これまでも2科目で構成していた古典に関する科目に加え、現代文に関する科目も2科目としたのは、生徒の多様性に対応するとともに、言語文化についての指導を重視するためである。

科目構成の改善について図示すると、次のようになる。



エ 内容構成についての改善（「国語総合」）



オ 言語活動例の位置付けについて

言語活動を通して指導事項について指導するという枠組みはこれまでと同様であるが、今回の改訂では、各科目及び領域の内容の（１）に指導事項を示すとともに、これまで内容の取扱いに示されていた言語活動例が内容の（２）に位置付けられ、再構成された。これは、内容の指導において、（１）に示す指導事項を（２）に示す言語活動例を通して指導することを一層明確にするとともに、各教科・科目等における言語活動の充実に資するためである。

なお、内容の（２）に示された言語活動例は、中学校までも含めて既に指導されていることである。また、例として示されているので、これらのすべてを行わなければならないものではなく、それ以外の言語活動を取り上げることも考えられる。

カ 「国語総合」の領域等との関連からみた各選択科目の指導事項

国語総合	A 話すこと・聞くこと	B 書くこと	C 読むこと	（伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項）
国語表現	（話すこと・聞くこと）	（書くこと）		（伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項）
現代文A			（読むこと）	（伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項）
現代文B	（話すこと・聞くこと）	（書くこと）	（読むこと）	（伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項）
古典A			（読むこと）	（伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項）
古典B			（読むこと）	（伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項）

（太線枠は、各選択科目において、より指導の中心となるものを示している。）

◇平成23年度高等学校における教科指導の充実 研究協力委員・研究委員（国語科）

研究協力委員

栃木県立宇都宮北高等学校 教諭 佐藤 弘子

栃木県立上三川高等学校 教諭 靱山 史子

栃木県立小山西高等学校 教諭 大塚 寛子

研究委員

栃木県総合教育センター 研究調査部 指導主事 古口 のり子

高等学校における教科指導の充実

国 語 科

学ぶ楽しさを生徒に実感させる古典の指導を目指して
— 苦手意識を緩和し、古典に対する興味・関心を高めるために —

発 行 平成24年3月
栃木県総合教育センター 研究調査部
〒320-0002 栃木県宇都宮市瓦谷町1070
TEL 028-665-7204 FAX 028-665-7303
URL <http://www.tochigi-edu.ed.jp/center/>